

第7章 まとめ

植田地区の開発史

はじめに

植田地区は大分川の支流である七瀬川流域に開けた東西2.5^{km}、南北平均1^{km}ほどの平野で、雄城台の台地を取り巻く形で「く」字形に折れる。標高は最も上流に近い口戸で18^m、最も低い八幡田で12^mほどであるので、その差は6^mほどになる。周辺を見渡すと、北には比高50^mの雄城台の独立した低台地、西の上流側には比高50^mほどの木の上の低丘陵が、そして南から東にかけては七瀬川が取り巻くように東流する。その川を挟んで南側には標高596^mの霊山が聳えている。

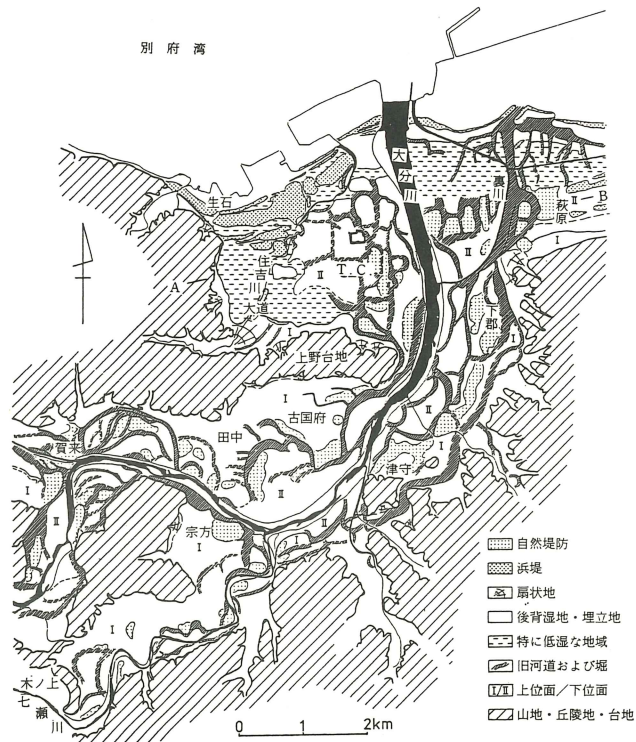
このほぼ独立した小世界は、さらに豊後の政治的、あるいは宗教的な中心施設である国衙（現在の古国府周辺）や国分寺（現在の国分）にほぼ均等な距離を保っている。特に、国衙に近いことが、この植田地区の歴史的位置を左右したであろうことは想像に難くない。古代における大分郡植田郷、あるいは平安時代後期に成立した植田荘などはそのような中で展開を遂げたものと考えられよう。

ここでは、そのような歴史的位置にあった植田地区の前史、そして展開期の開発史について、段階を追って見ていきたいと思う。

弥生時代から古墳時代の様相

縄文時代以前については資料が少なく言及できないので、ここでは資料の増す弥生時代中期以降から始めたい。⁽¹⁾ 弥生時代中期後半には、雄城台丘陵の南東裾部の深町遺跡で水路と考えられる溝が発見されている。この溝は幅6^m、深さ2^m前後の大きなもので、調査区内で総延長約55^mのL字形に検出されている。この地区は、いわゆる「深田」の広がる地点であり、玉沢地区と植田地区の平野部の中では低く水の集まりやすい場所で、また雄城台丘陵から流れ下る谷の出口にあたる。そのため湿田となっていたのであろう。それを考えると、深町遺跡で発見された溝も、この湧水を利用するものであった可能性が考えられるが、規模が大きく小河川からの引水を考えたほうが良いであろう。弥生時代中期後半には、河川からの灌漑を行うかなり限定的な水田が築かれていたものとすることができよう。洪積台地上の猪野中原遺跡（大分市）で弥生時代中期の溜井跡が発見されたが、このような規模の土木工事が沖積地においても当然なされたと考えられる。

次の弥生時代後期には、雄城台の丘陵上に大規模な環濠集落が形成される。⁽²⁾ 残念ながら、報告書が出ておらず詳細な時期は不明であるが、少なくとも古墳時代初頭までは集落は維持されていたようである（概報）。この集落では廃棄された住居跡の埋土から後漢鏡片が2つ出土している。また、丘陵南側に入る谷の谷頭の斜面では銅釧も発見されている。このように、雄城台遺跡の環濠集落は大分平野を望む台地上に立地する守岡遺跡や尼ヶ城遺跡などと並んで拠点集落として理解されている。従来この時期、つまり弥生時代後期には大規模な集落



第80図 大分川下流域の微地形分類図（千田氏原図）

『大分川流域』7ページ

は大分平野などの沖積地ではなく、そこを望む台地上に高地性集落として展開すると考えられていたのである。しかし、最近では七歩川流域に開ける下郡地区の沖積地や大分川と賀来川の合流点付近の賀来遺跡から沖積地の微高地上に立地する集落が発見されており、またこの植田地区でもガランジ遺跡で弥生時代後期の住居跡が見つかっている。このことから、この時期の集落立地は政治的のものというより、自然環境の問題が大きく、大分川のような中規模な河川流域は河川の氾濫や、水田面からの比高差などにより可耕地が少なく、七歩川や賀来川などの小規模な河川流域のほうが水田として利用しやすかった可能性を示している。

この植田地区では弥生時代後期後葉には植田市遺跡や北の後遺跡で水路と考えられる溝が発見されている。この溝でどこから導水したのかは不明であるが、七瀬川や大分川から直接引水したとは考えがたい。おそらく前時期に引き続き丘陵の所々に発達した谷からの小規模河川の水を集めたものであった可能性が高い。それによって形成される水田は当然ながら大規模なものとはなりえなかった筈である。しかし、この段階の水田遺構は確認されていない。植田条里H区の旧河道と考えられる溝は、弥生時代後期には埋没しており、旧河道の利用も当然考えられよう。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて台地上に立地していた集落は、古墳時代前期（庄内新段階から布留古段階）に沖積地に下りてくる。植田条里遺跡D区の集落はその一部分を調査しただけであるが、調査区外にも住居が多く展開する可能性もあり比較的規模の大きな集落と考えられる。また、植田市遺跡ではやはり、弥生時代終末から古墳時代前期に水路が掘削され、溝内部からは植田条里遺跡D区溝1から出土した遺物とほとんど同時期の遺物が大量に出土している。この両者の間隔は500mほどあり、両者の水路が直接的につながりを持つのかどうかはもちろんわからない。しかし、ほぼ同時期に同規模の水路が掘削されているのは注意してよい。七瀬川からの井堰灌漑の可能性が高いこの水路は、植田市遺跡の中では幅4m（ただし、当初の掘削では幅2m程である）で、深さは1.6m前後である。弥生時代終末から古墳時代初頭に掘削された後埋没し、古墳時代前期（布留式古段階）に掘り直しがなされ、またすぐに埋没するという。この水路からは水田に直接水をかける枝溝が掘られており、植田市遺跡内に水田の存在が推測されている。（ただし、上部が削平されており、確認できていない。）植田条里遺跡H区では、弥生時代後期の遺物を含む旧河道と考えられる落ち込みに溝が掘られており、水路の設定にあたって旧河道が利用されたことを示している。

この状況は古墳時代後期になって一変する。沖積地内の微高地に立地した集落は一部を残して姿を消し、かわりに段丘下の扇状地などに立地するようになるのである（北の後遺跡や六反田遺跡）。そして、沖積地では微高地を除く部分に、かなり大規模な水田が広がっていたものと想定される。すなわち、植田条里遺跡の各区や植田平石遺跡で確認された水田跡がそれである。これらの水田は、調査区内でも低湿地部分にのみ広がり、微高地上には及ばない。（あるいは、この水田部分は旧河道であった可能性も高い。）水田のある場所が沖積地の中央部に近い部分であることから考えてこの段階でも七瀬川や大分川から直接的な引水（井堰灌漑）をおこなった可能性も高いが、植田条里遺跡内では水路跡は確認されておらず不明とせざるを得ない。しかし、植田市遺跡で確認された古墳時代中期から後期の水路は、前時期の水路をしのぐ規模で、総延長約200mにわたって確認されており、この水路の延長線上にある植田条里遺跡や植田平石遺跡の水田が、これと関連無しに作られたとは考えがたい。植田市遺跡で検出されたこの時期の溝は、5世紀後半から7世紀中葉までの遺物を含み、幅10m、深さ1mほどで、何度かの掘削を繰り返している。この大溝が沖積地の微高地を縫うように流れ、面的に広がりを持つ水田を築きあげていった可能性が高い。この植田の平野における大きな画期である。

この現象は高橋学氏による地形環境分析結果とも一致する。すなわち、高橋氏は、古墳時代後期になると「相対的に高燥で集落の立地していた微高地が低湿化し居住に不向きになり、「かつて集落が存在したところにも水田が拡大され、ひとつづきの水田域が形成される」という。それは「河川の小規模な氾濫が繰り返され、それまで存在した微起伏を埋積し始めた」ためであるという。植田地区では微高地には水田が認められないものの、基本的にはこの七瀬川流域の植田地区にも当てはまると考えてもよいのではなかろうか。

条里の成立

この植田地区には条里遺構が顕著に残っている。ほぼ二百町に広がっており、阡線の方位は西方向に14度ずれている。現在、古井路と呼ばれる水路と嘉永井路と享保井路によって給水を受けている部分に分かれる。前者を「植田条里」後者を「宗方条里」とすると、その水路名称からわかるように後者は江戸時代後



第81図 出田氏による条里の復元（『大分川流域』240ページ）
 〈ベースの地形図は大正3年測図〉

期に宗方の丘陵を越えて大分川の野小鶴から水を引くものであり、江戸時代の開発地（再開発）である。

前者の古井路は、平安時代末期の建久3年（1192）に「南木上長者」が「佃」に水を引くために築いたとの伝承を持つ。現在「佃」という地名（小字）は条里を外れた地点にあるが、この「佃」には古井路の水が掛かる。つまり、条里の西の端（小字塚の坪）より西側には現状では条里区画はまったく見られないが、現在ここにも古井路の水が掛かっているのである。これは、本来条里区画があったものが河川の氾濫によって乱されたと考えられるのか、あるいは本来条里区画は「佃」の周辺には及んでいなかったものか、どちらかであろうが、後者の可能性が高い。つまり、前記の伝承は条里区画の及ばない「佃」周辺（畑地、あるいは空閑地）に水を引くため、古井路の取水口を変更した事の反映と考えられるのである。つまり、本来の井堰は現在のものより下流側であって、本来的には塚の坪あたりの条里部分までしか及んでいなかったであろう。⁽³⁾

植田市遺跡（河川改修地区）では、条里に沿う奈良時代から平安時代前期の溝が検出されている。ごく僅かであり、この溝が条里とどのような関係にあるのかはわからないが、後述の11世紀から12世紀の溝より南側を流れているのが注目される。つまり、この溝が幹線水路であれば、「塚の坪」より西側部分にはやはり水がかからなかった可能性があるのである。

ところで、現在の条里区画の見られる部分の水掛かりは、単純化していえば東西に長い沖積地の中の中央部付近に排水路が西から東へ流れ、それを挟むように2本用水路が東西に延びている。つまり、中央部付近がやや低く、南北両側がやや高いのである。そして、この南側の用水路は江戸時代の慶安年間(1648-1652)に古井路から別れたものといわれ、そうすれば、条里の南側半分に水が掛かったのは江戸時代以降ということになる。そう考えれば、条里水田は(区画のみ存在した可能性もあるが)さらに狭い範囲に限定されることになる。

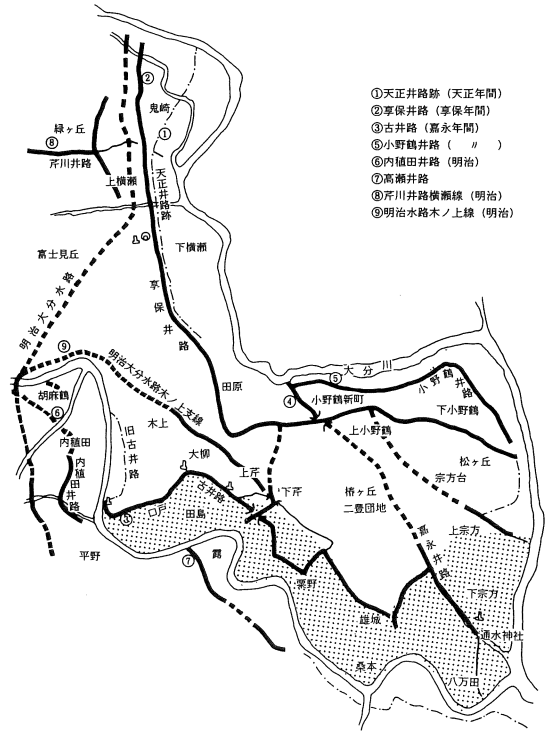
一方宗方条里はどうであろうか。前述のように、江戸時代に大規模な水路の掘削を臼杵藩がおこなっており、それ以前の状況は不明であるが、地形的にもあるいは古井路の水の量から考えても、古井路から水をとるのは難しい。そうすれば、別系統の水路を想定せねばならない。それは、古井路とは異なり、大分川からの取水ということになる。そうすれば、現在の小字「北の後」の部分の丘陵が大分川に張り出している部分を取り巻くようにして上流側から水路を延長していた可能性が考えられる。⁽⁵⁾ 古老の話では、「北の後」の部分に以前水路の跡があったということであり、また江戸期の水路が一端「北の後」の部分まで水を回していることを考えても、玉沢条里に掛かる水は「北の後」あたりが最も初めの地点になるのであろう。そして、江戸時代には水の不足を補うために、丘陵の上を掘割や隧道を掘って大分川から引水をしたのである。

このように考えられるとすると、この植田地区には別系統の水路を持った2つの条里が存在したことになる。ただし、現在の資料では平安時代末以前に植田条里が成立していた可能性が指摘できるに止まる。しかし、大分郡植田郷がこの地を中心として成立したものであることは少なくとも言えるのではなかろうか。

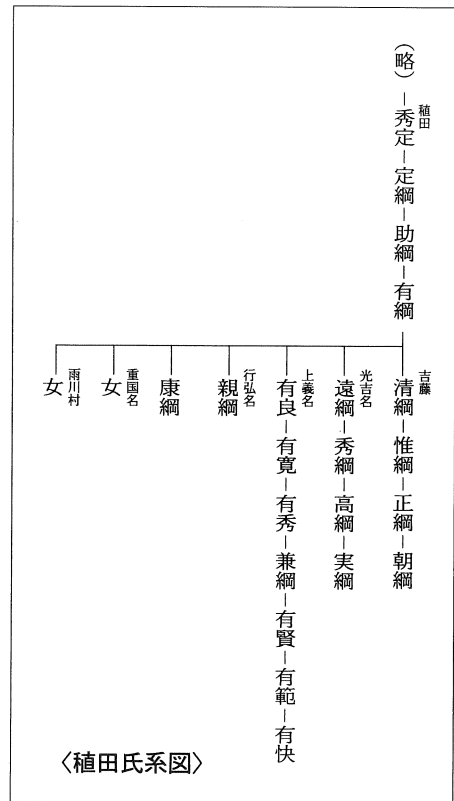
植田荘の成立と展開

植田荘の文書上の初見は保元2年(1157)の「太政官符案」で、保元の乱で敗死した藤原頼長領を没官し、後白河天皇の後院領とした中に植田荘(「植田荘」と誤記)が見える。また、大神系図によると、植田有綱は源平合戦の勲功の賞として吉藤名野津原郷を賜った、とあり、少なくとも平安時代の末から鎌倉時代初めにかけて、後に「植田」を名乗る大神系一族がこの地に足がかりを得ていたことがわかる。しかし、系図上の植田氏の祖である季定は、すでに植田を称しており、大神氏の他例からみて、平安時代後期の段階で郷司などとして、植田郷とのつながりが生まれたと考えるのが適切であろう。

弘安8年(1285)の凶田帳によると、植田荘は10の名に分かれ、それぞれに地頭があり、領主的支配を行って



第82図 七瀬川流域の水路図(『嶺北の文化財』より、一部改変)



〈植田氏系図〉

平安時代後期の段階で郷司などとして、植田郷とのつながりが生まれたと考えるのが適切であろう。

いたことがわかる。大神系図によると、前述の有綱の子、清綱、遠綱、有良、親綱、女は各々、吉藤、光吉、上義、行弘、重国を領有していたが、弘安の段階では吉藤名は大友親秀の三男能泰に、光吉名は遠綱の三代後の實綱の時欠所され大友親泰にそれぞれ地頭職がわたり、上義名のみが有良の子孫に伝えられていた（行弘名は弘安図田帳に地頭の記載が無い）。重国名は「有綱跡」と記載されており、女に伝えられた後、一期分で返されたものであろう。図田帳によると、上記の4名以外に植田氏一族が地頭であるのは乙犬名だけである。

南北朝期になると、有良の系統である靈山寺院主有快がでて、上義、乙犬、上乙犬、下永富、吉藤、福重渡地内地行地半分地頭職を兼帯するに及んで、植田氏の最盛期を迎える。この流れを見ると、本来惣領家は七瀬川上流域の吉藤名が本貫地であったのが、後に大規模な平野が展開する現植田地区に本貫地を置く有良流が勢力を伸ばしていったことがわかる（名の比定地については後述）。この点は、靈山寺や高瀬石仏などの存在も考慮に入れつつ、広い平野での沖積地の安定化に伴う水田開発というプロセスと表裏一体のものである可能性を探る必要がある。

次に、前述の点を確かめるために「名」の現地比定を行う。これまでに各氏により比定が試みられており、一覧表にまとめてみると右表のようになる。⁶⁾ これから見ると、現在遺称地名などからほぼ間違いないと考えられているのは、吉藤名、光吉名、千歳名などである。もっとも大きな名である乙犬名と上義名は、遺称地名がないことから苦労しているが、佐藤氏は寒田から旦野原地区に比定している。しかし、植田荘325丁余のうち3割強を占めるふたつの名が条里区画のある植田中心部を外れることは考えがたい。そうすれば、植田地区には2つの系統の水路があったことが注意される。すなわち、古井路の水掛かりの「植田条里」と、大分川からの水が掛かる「宗方沢条里」である。もちろん、名が単系の水路によって形成されていたとの確証はないが（散在名ということも考えられる）、両者が上義名と乙犬名に比定される可能性は高かろう。その場合、北の後の南西隣の小字「乙院屋敷」が注目される。「乙院」と

「乙犬」は転訛するのはたやすく、さらにこの「乙院屋敷」が中世以来の、中央部分に館的区画を有する「ムラ」の形状を呈していることも加味すると、この乙院屋敷は名主か小地頭の居館を中心とした「ムラ」であった可能性が考えられるのである。時代は下るが、文禄年間写しの「植田荘名々給人注文」に「乙犬名之事、是ハ田数ひみつにて候、乙犬名六十五貫分雄城無多」と見えるので、「雄城無多」が何を指すのかは不明であるが、乙犬名と雄城（今の玉沢地区にある雄城台周辺）との関係を示すものとして、乙犬名の位置比定に一つの傍証となるだ

光吉名五拾二丁 大友兵庫入道殿 福重名十八町二段大 利根二郎頼親	長谷王入道信覺	重国名拾五町三段 植田八郎有綱跡、而四條侍從殿知行、而當國住人	千歳名拾八丁七段 相模國御家人川村新五郎清秀 法名戒惠 今戒本云	松武名十六丁二段半 松尾彌二郎惟泰跡、當知不分明、	行弘名三拾七十一丁	永富名十六町一段三百廿歩 同人	吉藤名四拾丁 豊前大炊三郎藏人能泰 道法名	乙犬名六拾丁八段 同人	上田莊三百三拾五丁二段 領家大納言一位御局 上義名五拾六町六段 大輔房有秀 乙犬名六拾丁八段 同人
-------------------------------------	---------	---------------------------------	----------------------------------	---------------------------	-----------	-----------------	-----------------------	-------------	---

〈豊後国図田帳抜粹〉

名	渡 辺	佐 藤	日本地名大辞典 (角川書店)
上義名	?	大分市寒田	靈山周辺
乙犬名	?	大分市旦野原	靈山周辺
吉藤名	野津原町	野津原町	野津原町
永富名	大分市秋岡・岡	大分市内植田	大分市秋岡・岡
行弘名	?	野津原町	?
松武名	?	大分市横瀬	?
千歳名	大分市木の上	大分市木の上	大分市木の上
重国名	?	大分市宗方	大分市石川?
光吉名	大分市光吉	大分市光吉	大分市光吉
福重名	?	野津原町	?

「名」比定地一覧表

ろう。

そうすれば、大分川から引水された宗方条里の部分は乙犬名に比定され、残りの植田条里は上義名に比定できる可能性が高い。この両名とも、前述の通り鎌倉時代後期から南北朝期には植田氏の庶流のなかで最も有力な霊山寺院主の系統が地頭職を保持しており、大規模な水田が展開するこの平野部は、植田氏の荘園経営の中核になっていた場所としては最も相応しいのである。また、この「乙院屋敷」の近くに植田大明神社が存在することもこれを支持する。この植田大明神社は、社伝によると植田忠綱が「宮ノ迫」（宗方台）に勧請したものであるといい、江戸時代の「豊後国志」には忠綱を祭神としてあげており、御霊的な神社としている。これは、忠綱が吉藤名地頭で植田氏の惣領家の人物であるが、忠綱は大友親秀の三男能泰の子朝綱を養子として養っていたが、すぐに忠綱は亡くなり家臣に家督争いが生じた（これ以後植田氏惣領家は大友系となる）。これらのことからすると、忠綱が非業の死を遂げた人物として、植田氏内部で祭られる要素があり、それを有良流の植田氏が有力となるに伴い、乙犬名のほうへ勧請したことが考えられる。

このように乙犬名と上義名の位置を考えると、上義名の水田を望む南側丘陵の裾部に高瀬石仏が築かれる理由も説明できそうである。⁽⁷⁾ つまり、上義名には領主の直営田である「佃」を含んでいること、さらに前記した古井路の伝承も加味すると植田氏の平安時代末段階の開発がこの上義名の条里区画水田の再開発にあったことが推定できるであろう。そこに平安時代末（鎌倉時代中期まで下るといふ説もある）と考えられる石仏が作られているのである。無関係とは考えがたい。

植田市遺跡1991年度調査区からは11、12世紀と考えられる溝が検出されている。現在の古井路とは微妙に重ならないが、大局的にみればその前身である可能性は高い。この溝は西（上流側）に延長すれば「佃」の方へ向かい、そうすれば、前記の伝承（佃への引水）がある程度史実を反映したものである可能性がでてくる。

その他の名については、今回の調査範囲からは大きく外れる可能性が高く、今回は言及できない。

ところで、南北朝期の建武3年（1336）、植田有快の館が南朝方によって焼き打ちを受けると言う事件が起こる。これは、南朝方が国府（高国府）を目指して植田荘にある霊山寺に盾籠った時に起こった事件であり、霊山寺から高国府への経路上に有快の館があったと考えられる。この時には館とともに「在家数十軒」が焼かれている。このことは「館」と在家の位置が近かったことを示す。つまり、ある程度の集村形態が成立していたと考えられるのである。では、この有快の館はどこであろうか。これは前述した通り、「乙院屋敷」周辺をその地点とする可能性があるのである。残念ながら発掘調査では削平が著しく、中世の遺構は検出されなかったが、この場所は宗方条里への水の掛かりの最初の地点であると同時に、大分川渡河地点でもあり、高国府（守護所）の防御ラインを形成するとともに領域支配の拠点的位置にあるのである。

このような集村形態をなす「ムラ」は、この植田・宗方地区には10箇所ほど見られる。このような「ムラ」には方形の区画が見られる場合が多い。桑本では方50^歩ほどの堀を巡らせる遺構が現存し、下宗方では方1町程度の方形区画が認められる。

一方、市の集落では、現在の集落からやや外れる地点で発掘調査により南北55^歩、東西60^歩の屋敷遺構が検出されている。この15世紀後半から16世紀にかけての屋敷遺構は、結局江戸時代以降の「市」集落と何ら重なりを持たなかった。これは、この屋敷遺構の地名である小字「園田」に象徴されるように、個別小規模開発のための拠点である可能性が高く、植田氏滅亡以後戦国期にこの植田荘が大友家臣の給地として様々な人々に分割されたことと関連が深いと考えられ、結局それ以前の在地との繋がりのなさが、この遺構を限定的な位置に置いた要因であると考えられる。つまり、逆に考えれば、他の「ムラ」の痕跡は戦国期に大きな改変を受けた可能性は高いものの、それ以前から在地との繋がりの中で存続した、言い換えれば支配や経営、あるいは防御のための拠点としての位置づけが与えられよう。それらは、田染荘尾崎屋敷で検証されたように名主（小地頭）や百姓名主などの屋敷を中核とする同族集団の結合体の、平野部における典型的な一居住形態と理解でき、それらが散在する景観が、中世後半期のこの地区における景観であったとすることができよう。⁽⁸⁾

なお、江戸時代になると特に臼杵藩領において井路の掘削をしばしば行い、平野部の全面水田化を推し進めた

事を付記しておく。

まとめ

大分川の支流である七瀬川流域に広がる植田地区の開発史について、弥生時代から中世までを見通して記述してきた。必ずしも資料的に十分とは言えず、多くは今後検証が必要なところである。

ところで、植田地区と宗方地区は一続きの平野であるが、水系が七瀬川と大分川本流というように異なり開発の歴史も異なる。しかし、弥生時代後期後葉の水路の存在、古墳時代後期の水路や水田の存在など共通点も多い。つまり、個別の開発とは言うもののその画期についてはほぼ同様であったことを示している。

最後に、この地域でおおまかな展開の過程を描いてきたが、この事が他地域の発掘事例からみて、どのような位置にあるのかを検討してまとめとしたい。

まず、深町遺跡の溝から推測されるように、弥生時代中期後半には小河川を利用した小規模な灌漑施設をともなった水田が沖積地の限られた部分に営まれたと考えられる。

そして、弥生時代後期後葉には、植田地区を始め、県下の多くの遺跡で溝が確認されるようになる。その溝は集落を画するいわゆる環濠と、水田に水を引く水路とに大きくは分けられよう。そのどちらであるかはなかなか判断できない場合があるが、確実に水路と言えるものは、直入町の長野津留遺跡、大分市北の後遺跡、日田市三和教田遺跡B地点⁽⁹⁾などである。長野津留遺跡の溝は、小規模な平野の端で幅約3m、深さ2mのV字形の溝を掘削するもので、明らかに河川からの水路と考えられるものであった。このようにこの時期に出土例を増す鉄器(刃先)を利用して以前より明確な、そして規模の大きな溝を掘削するようになったのは注目して良い。いずれも後期後葉には掘削されており、短期間で放棄されるか、あるいは古墳時代前期まで掘りなおして使用されている。そして、最終的に遅くとも古墳時代前期、布留式中段階には廃棄されるのである。この事は、水路の取水口(井堰)の位置の変更を迫られるような環境変化がかなり広範に起こったことを示すと考えられるであろう。

古墳時代初頭になると、中規模河川流域でも集落は洪積台地からおり、沖積微高地に立地するようになる。この段階では、沖積地の安定化が進んでいたものと考えられよう。しかし、これらの集落は150年間ほどの間存続したあと中期中頃になると姿を消す。

植田地区では古墳時代後期になって、はじめて水田跡が確認される。この植田の平野では植田市遺跡の水路を基幹水路と考え、平野のかなりの部分で水田化が行われたと推測した。この水田はかなり広範囲に存在することが想定できるが、それでも、ところどころの微高地は水田とはなっていなかった。集落は、丘陵の裾に近い比高数mほどの段丘上や微高地に立地する。この時期、県下各地で広範に横穴墓が築かれる。かなり小さな谷部の丘陵崖面や、大規模な平野を見下ろす崖面などに横穴墓が穿たれるが、これは様々な地形に応じた水田開発が進行しつつあった事を裏付ける現象であろう。

この地区は、その後古代では植田郷が、中世には植田氏を開発領主として植田荘が成立した。今回の発掘調査で、また県下各地の条里発掘調査で、その成立時期を確定できる資料は得られていないが、古墳時代後期に出現したかなり規模の大きな水田が、条里出現の前提として、各地に存在した事は確かであろう。

ところで、植田郷の中心部は植田から宗方地区にかけて広がる条里部分であると考えられるが、郷の中心的な施設と思われるものは発見されていない。しかし、植田市地区には印陰社があり、一説では国府の存在も指摘されてきた。植田市遺跡では該期の顕著な遺構は出土しておらずこの地区が中心的な地域であったということは考古学的には確認できないが、ここが条里地割りの西限のすぐ外側に当たり、近世になるまで十分に水がのらない微高地であったことを考えれば、条里水田をまじかに望むこの地区に何らかの施設があったと考えても不自然ではない。

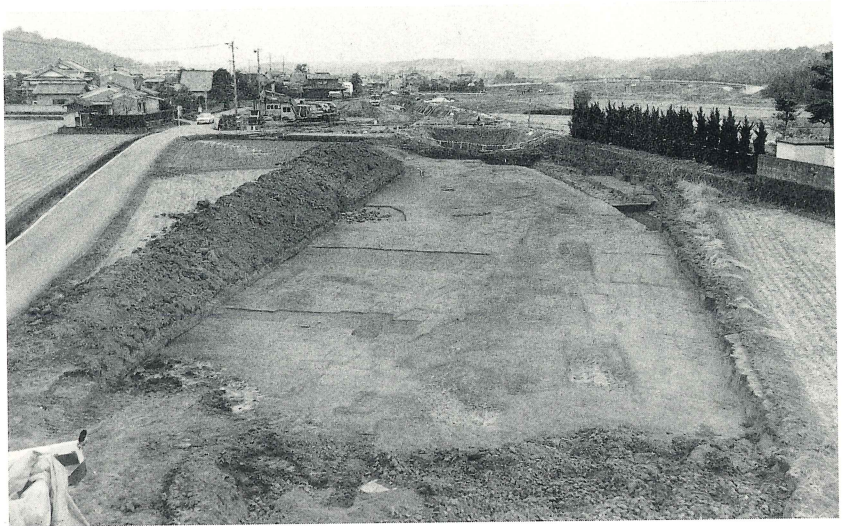
中世になると、植田荘の成立が条里部分を中心とした地区にあったことは前記した通りである。条里地割りがいつ成立したのが考古学的に確認できないので、その成立の契機が「再開発」にあったのかどうかはわからないが、その可能性は高い。いずれにしても、現在の水路による灌漑体系が、中世を通して形成されたものである

ことは間違いない。それでも現在見られるような全面水田化には至っていなかった。この点は山間の谷間に展開する田原別符などでも指摘できる点である。しかし、これは決して中世の水田造成技術の未熟さのみその要因を求められるものではなく、むしろ中世には沖積平野の多様な利用を積極的に行っていたと考えたほうがよい。近世という在地においては完全な水田中心社会への移行が、それを推進する力であったと考えておきたい。その結果、江戸時代には補完的な水路が山を削り隧道を穿って作られ、平野部の全面水田化に寄与したのである。

註

- (1) 植田市遺跡（河川改修地区）や植田平石遺跡で刻目突帯文土器が出土しており、初期稲作に係わる可能性があるが、いずれも遺構がなく様相は不明と云わざるを得ない。しかし、この時期に沖積地に立地することは注意してよい。
- (2) 集落としてはすでに中期から存続するが、環濠を持つようになるのは後期になってからである。
- (3) その場合、小字田嶋前と田嶋に挟まれた七瀬川から細長く伸びる地割り（小字大津川原）が何らかの痕跡を示している可能性が高い。これを延長すると「市」の集落で急に方向を変える「古井路」の延長線上に位置するものも、この地割りが旧水路であった可能性を示していると言えよう。
- (4) 現在の「古井路」取水口に立つ明治39年の記念碑に次のように記されている。「古井路建久三年壬子三月竣功或傳木上村南長者所開鑿也慶安中木上口戸両村里正相商而変水口加修理使粟野村某桑元村某監其工自木上桑元流域壹里余諸村到干今襲其利焉恐久而訛其實水畔建是碑畧記由来以傳不朽云 明治三十九年三月」植田条里遺跡B区の溝2の江戸時代の水路はそのことを裏づけるものであろう。
- (5) ただし、「北の後」の発掘調査では、古代・中世の水路跡は検出されていない。発掘調査区のさらに山側を通っていたのか、すでに削平を受けていたのかは判断できない。もちろん、今後は本来この地点からの導水がなかったことも考慮に入れる必要がある。
- (6) 各氏の各比定は下記文献を参照した。
渡辺澄夫「豊後国荘園公領史料集成五（下）」所収の解説
佐藤満洋「中世の植田荘と植田氏」（『郷土史野津原』1980年）
- (7) ただし、渡辺澄夫氏が言われるように、永富名が高瀬であれば、吉藤名とともに植田惣領家の所領であった永富名と高瀬石仏との関係を考えねばならない。その場合でも、対岸の条里地区の再開発は植田氏にとって、必然的になされるべきものであったはずであり、後に「上義名」として成立したこの地区が当初惣領家との係わりなしに成立をしたとは考えにくい。
- (8) 今回や、他の様々な発掘調査では、条里区画内において中世の集落遺跡は検出されていない。このことは、大局的にみると中世にはこの植田地区の沖積地（現在の集落部分を除いて）に広範に集落が点在した可能性が低いことを窺わせる。換言すれば可耕地としての利用が大きく進んでいたことの証左である。未だ調査例の多くない条里外の部分や、近世に水田化が進んだ可能性がある部分の発掘調査で、中世の痕跡がどのようなものか注目されよう。
- (9) 調査者は集落を画する溝としているが、古墳時代後期にほぼ同位置で水路が掘削されており、溝埋土からも水路と考えたほうが良いと考えられる。

写 真 函 版



ガランジ遺跡のa区全景（西から）



ガランジ遺跡のa区全景（東から）



ガランジ遺跡のa区溝1 堆積状況



ガランジ遺跡のa区土杭



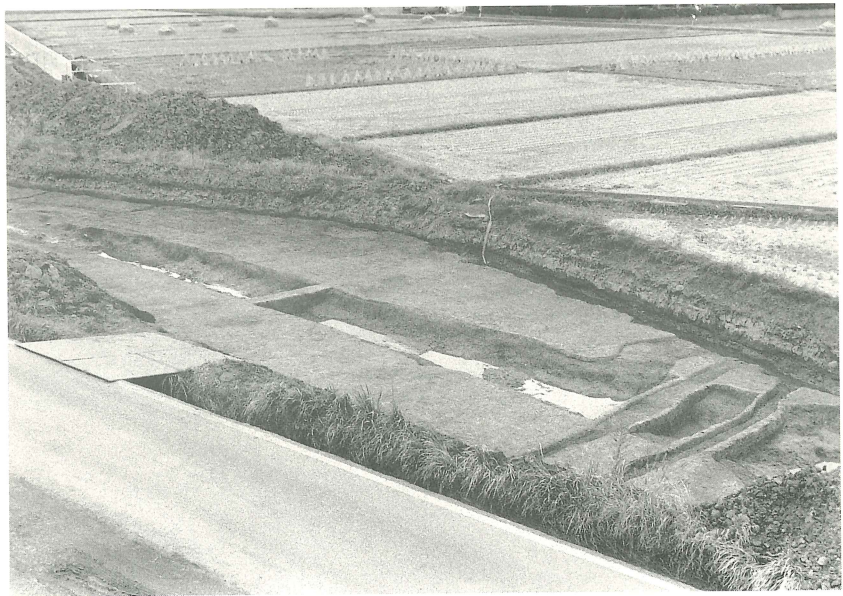
ガランジ遺跡のa区住居跡
遺物出土状況



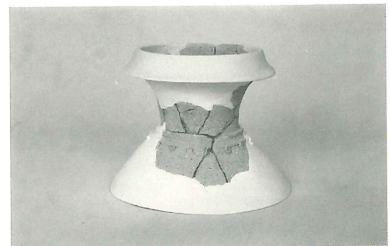
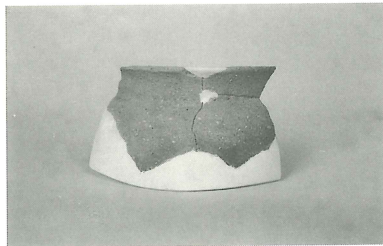
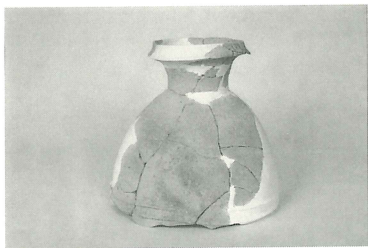
ガランジ遺跡のa区
住居跡完掘状況



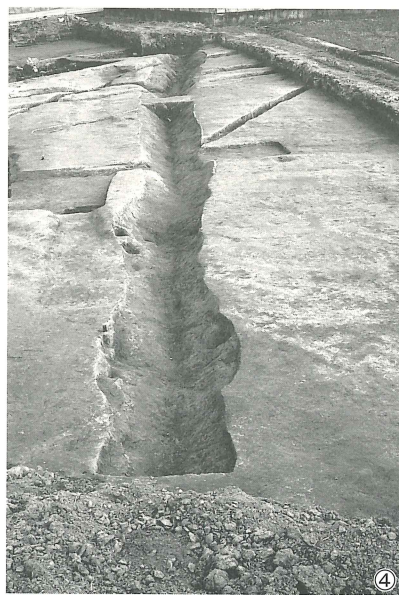
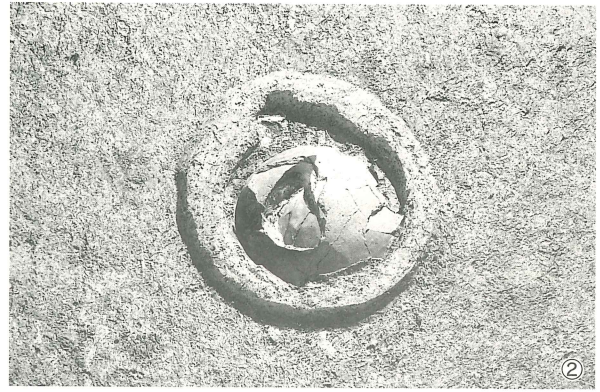
ガランジ遺跡のb区全景



ガランジ遺跡のb区 溝



ガランジ遺跡出土遺物



① 植田市遺跡 1991年度調査区全景

② SK 1

③ SD 1

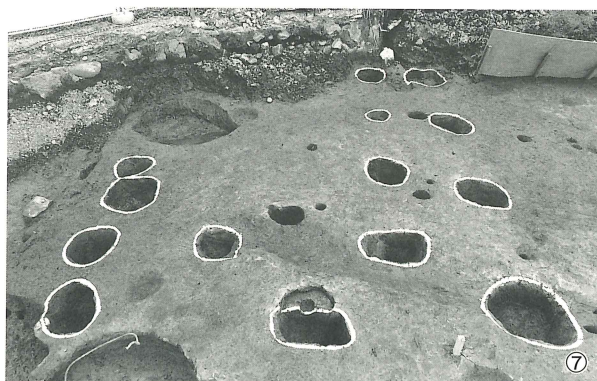
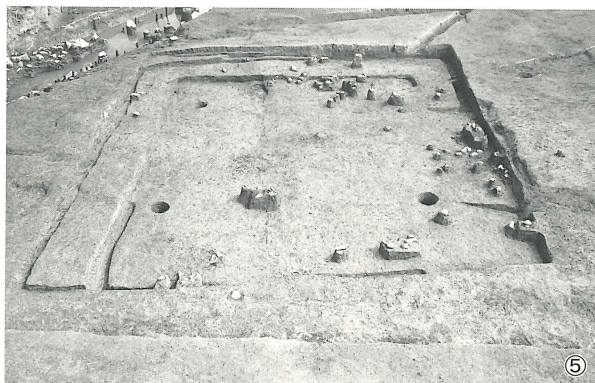
④ SD 2

⑤ SH 1

⑥ 植田市遺跡 1992年度調査区調査風景

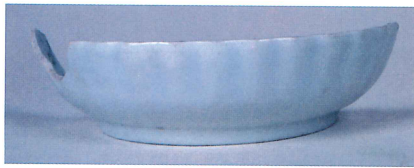
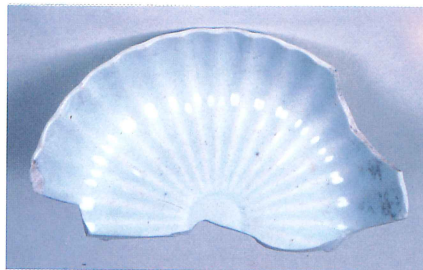
⑦ SB 2・3

⑧ SB 1

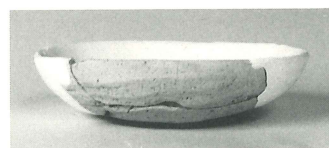
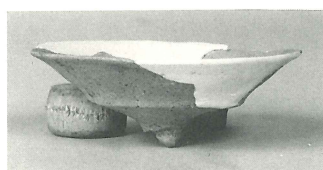
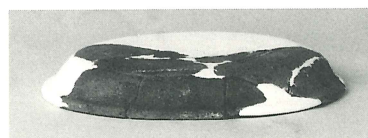
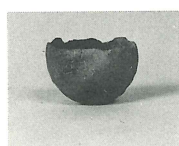
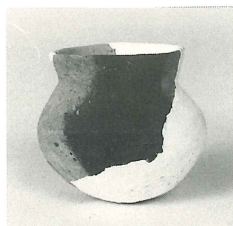
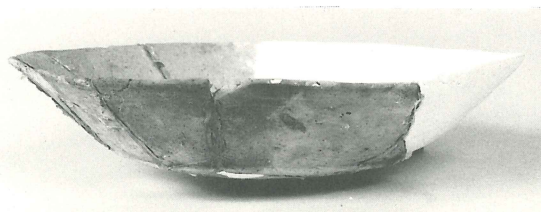
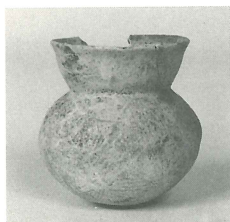
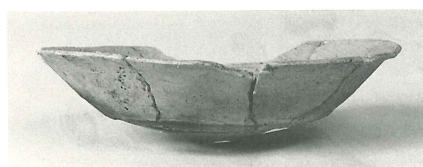
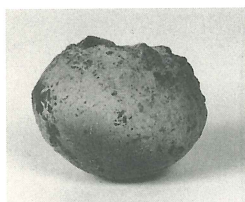
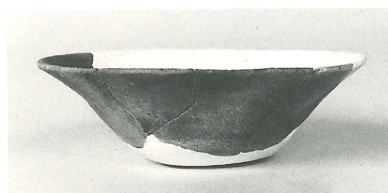




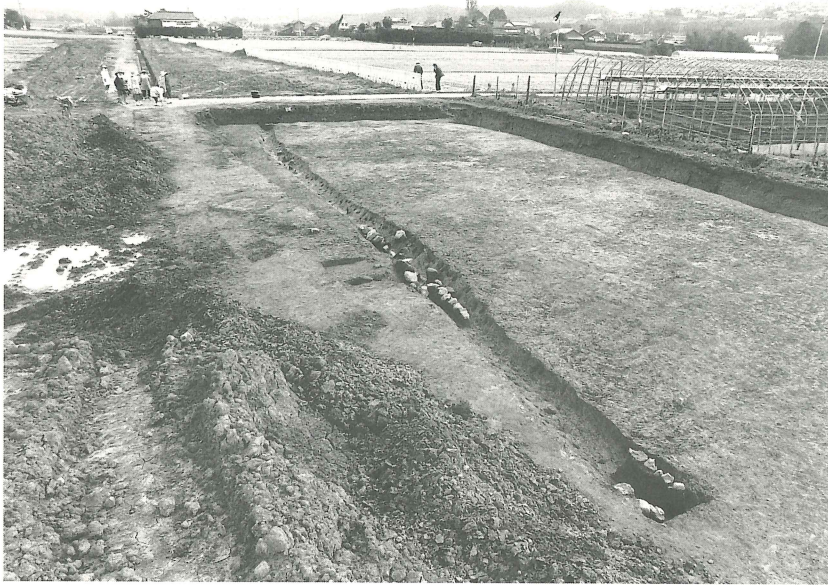
植田市遺跡SD1 出土遺物①



種田市遺跡SD1 出土遺物②



植田市遺跡出土遺物



植田条里遺跡B区全景



植田条里遺跡B区 溝

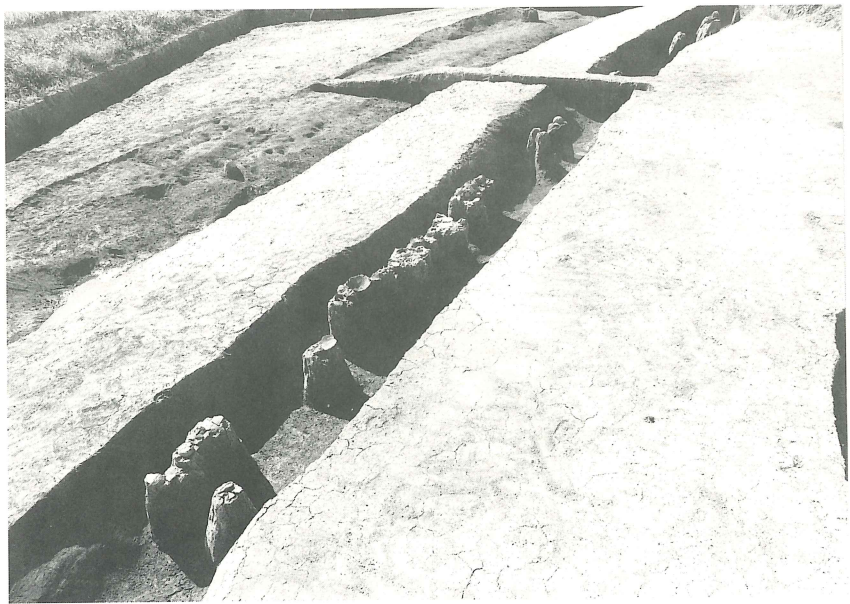


植田条里遺跡B区 溝2、3

植田条里遺跡D区 溝1~3



植田条里遺跡D区 溝1~3



植田条里遺跡D区 溝1~3





植田条里遺跡D区 溝4



植田条里遺跡D区 溝2
遺物出土状況



植田条里遺跡D区 溝2
遺物出土状況

植田条里遺跡D区 1号住居跡

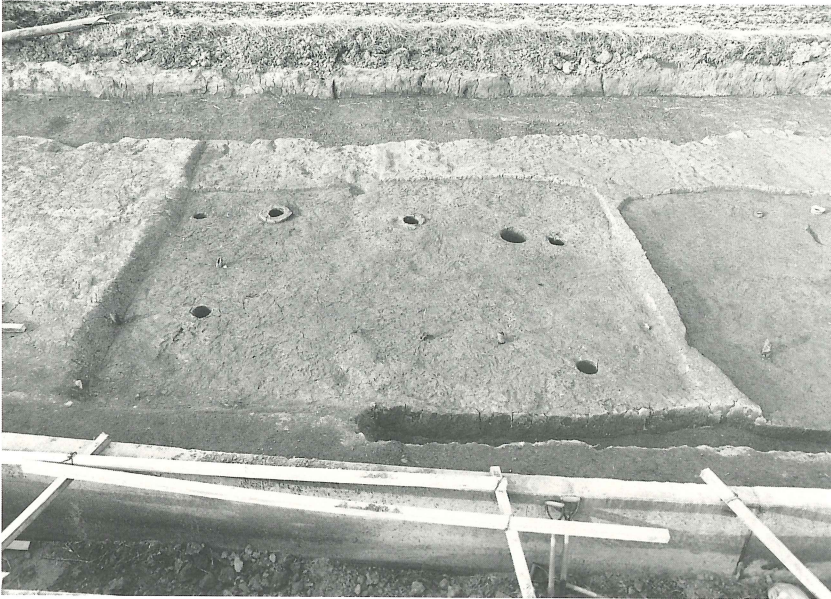


植田条里遺跡D区 2号住居跡



植田条里遺跡D区 3号住居跡

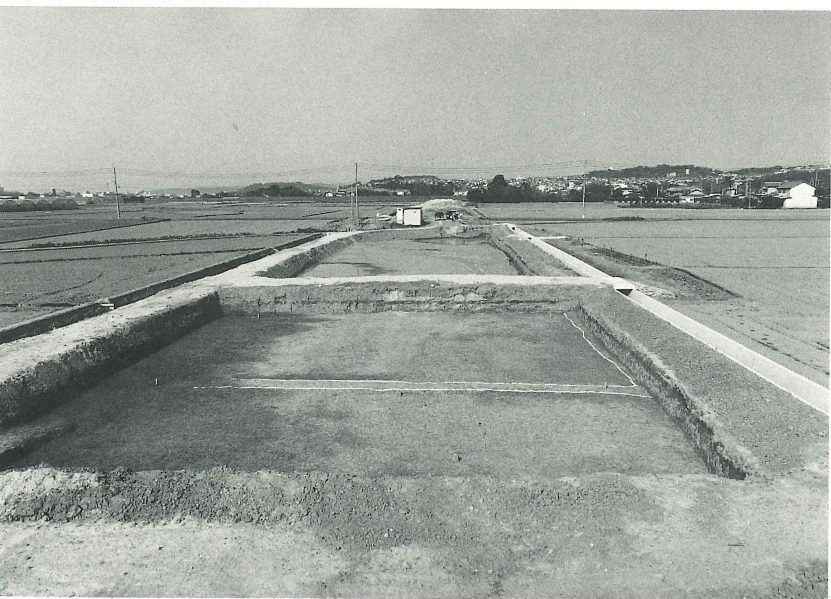




植田条里遺跡D区 4号住居跡



植田条里遺跡D区 南壁



植田条里遺跡F区全景

植田条里遺跡 F 区

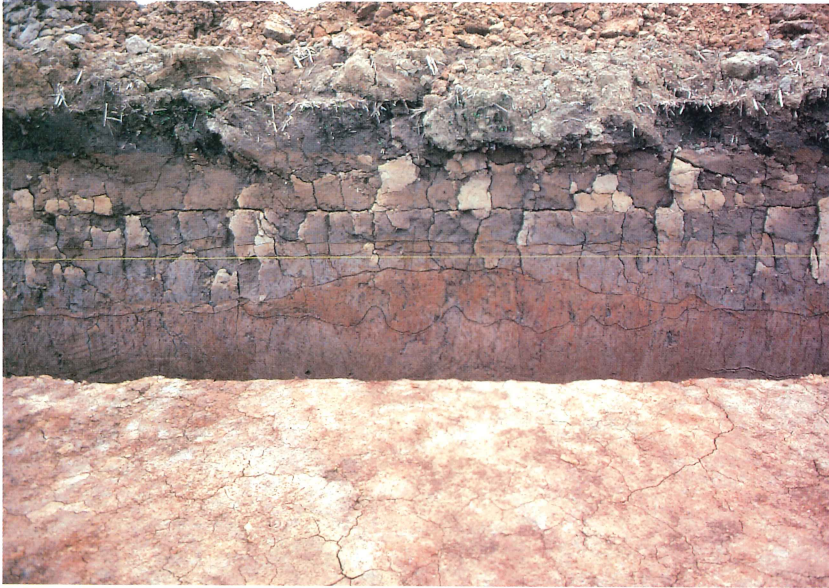


植田条里遺跡 F 区



植田条里遺跡 F 区 南壁土層





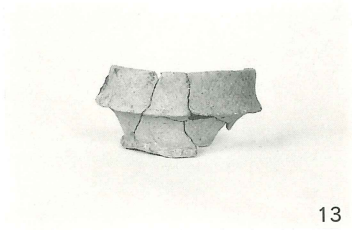
植田条里遺跡F区 南壁土層



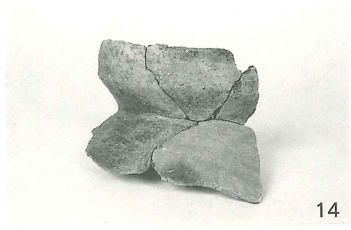
植田条里遺跡H区全景



植田条里遺跡H区 4号溝



13



14



15



16



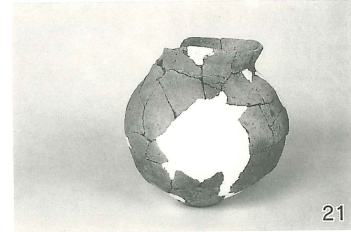
17



18



20



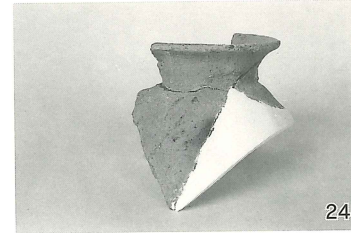
21



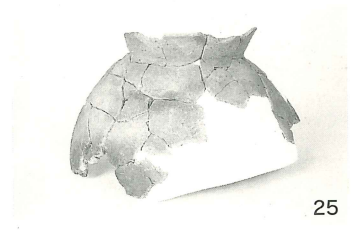
22



23



24



25



27



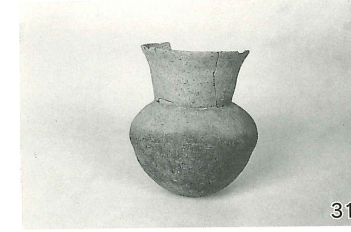
28



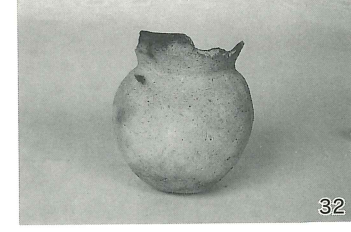
29



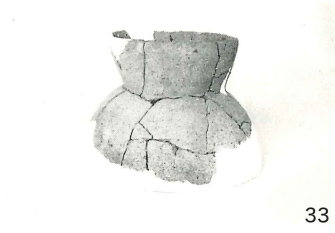
30



31



32



33



35



36



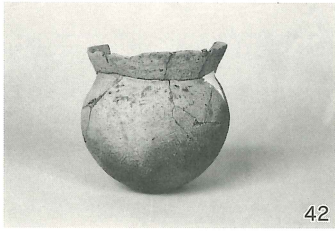
38



39



40



42



43



44



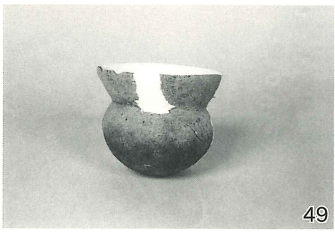
45



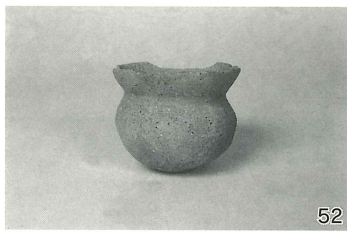
47



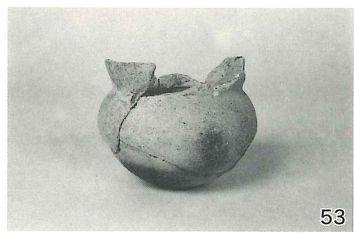
48



49



52



53



54



55



56



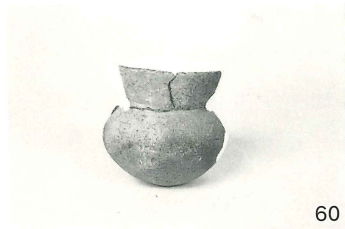
57



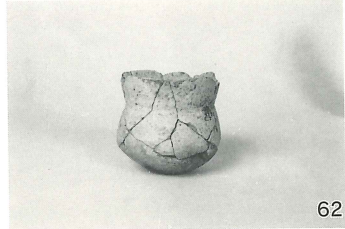
58



59



60



62



64



65



66



67



68



69



70



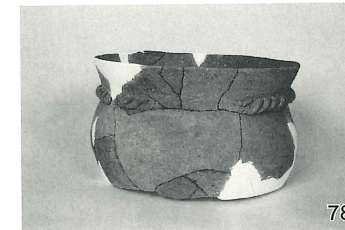
71



74



76



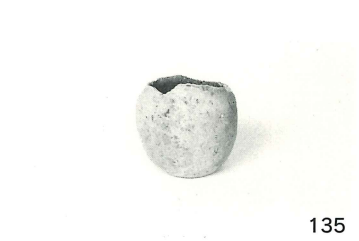
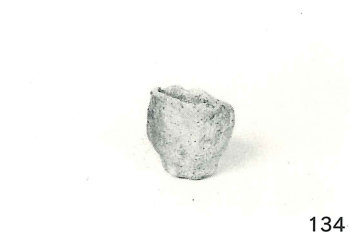
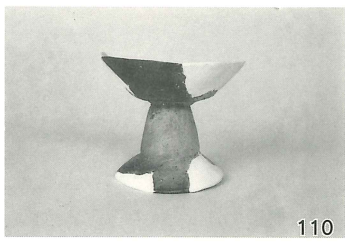
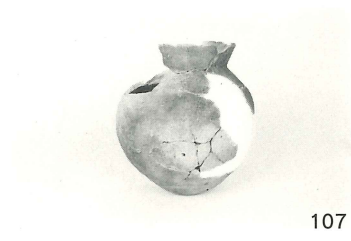
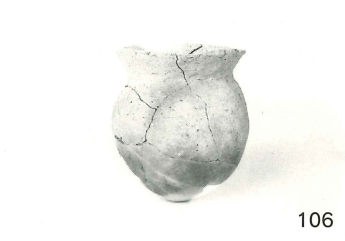
78

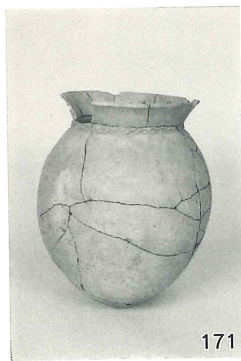
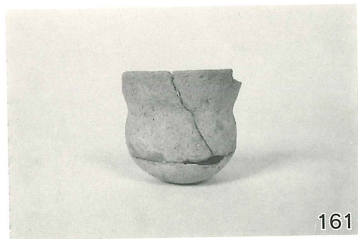
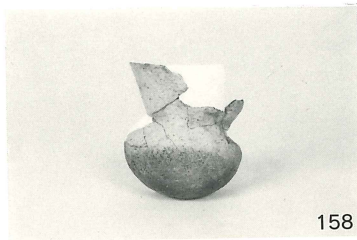
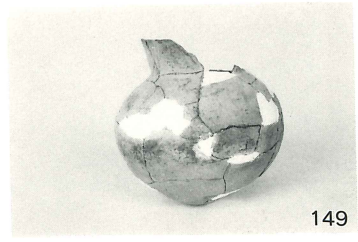
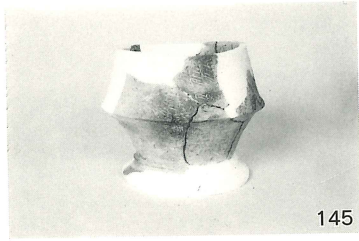


80



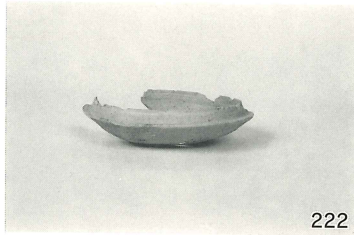
82







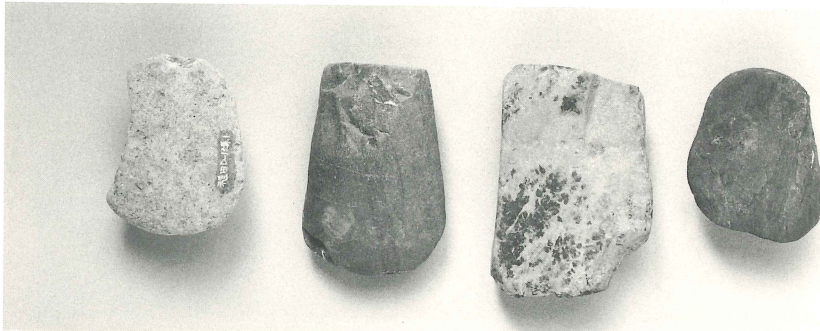
219



222



234



143

140

142

141



144



255

植田糸里遺跡出土遺物



218

付章 1. 植田条里遺跡の水田開発に関する考察 ～土壌のプラント・オパール分析～

大分短期大学助教授 佐々木 章

イネをはじめアワ・ヒエ・キビなど主要な雑穀類を含むイネ科植物の葉身中に存在する機動細胞は、その細胞壁に珪酸が付着しやすく植物の種類ごとに特徴的な形状をしている。また、厚い珪化細胞壁は、植物が枯死した後も分解をうけにくいいため、機動細胞の形状を保ったまま、永く土壌中にとどまっている。そのため、土壌に残った珪化機動細胞の化石（プラント・オパール）を顕微鏡下で検出することで、給源植物を推定することができる。さらにプラント・オパールが全て土壌中に残っていると仮定できる場合には、現生植物中の珪化機動細胞密度を使って土壌中のプラント・オパールの量を給源食植物体重に換算することにより、過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定することもできる。このような方法をプラント・オパール定量分析法と呼び、1970年代後半から発掘があいついだ各地の生産跡遺跡の土壌の分析をおこなってきた。さらに進んで、1980年からは本格的な発掘調査に先立ってプラント・オパール分析を行うことにより埋没水田土層を発掘以前に予測する実験（水田探査法）が開始され、夫敷遺跡（島根県）、若江北遺跡（大阪府）、垂柳遺跡（青森県）などで成功をおさめた。その後も多くの研究が積み重ねられているがプラント・オパール水田探査結果と本発掘で確認された水田遺構の検出結果は一致するケースが多く、プラント・オパール水田探査は事前調査法として高い評価を受けている。現在では、プラント・オパール分析の結果、水田作土層の可能性が高いと指摘された層を発掘した結果、遺構が確認出来なかった場合には、洪水や後世の耕作による攪乱などで遺構が破壊されている可能性が第一に考慮されるようになってきた。

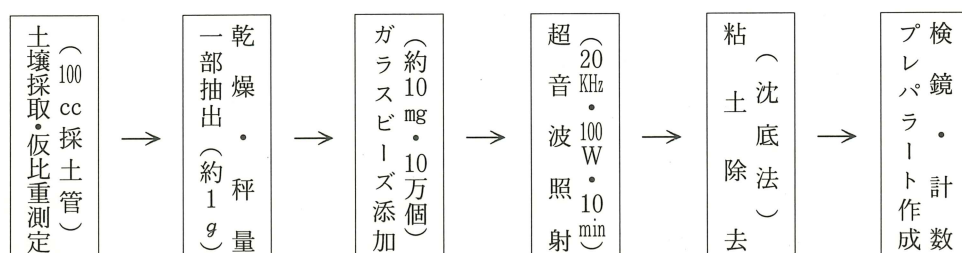
今回、植田条里遺跡では、色調から乾田土層と考えられる累層と、その下に青灰色の粘土層が検出された。一部では、残り具合は良くないが、畦畔と考えられる高まりと、溝状の遺構も検出された。そこでプラント・オパール分析によって、水田作土層を推定し開発史の手掛かりを得ようとした。

調査分析方法

植田条里遺跡D-1区とF区の南壁面を観察して、分析用の土壌を採取した。D-1区では、現在の水田作土層以下③層までは褐色が強く④層⑤層は青灰色、⑥層は黄褐色であった。④層には6世紀後半から7世紀にほぼ比定される遺物の包含層である。F区では、上位IV層まで、褐色系の累層が認められる。VII層は古墳期以前の遺物包含層で灰褐色である。VIII層以下は赤褐色が強く、X層は弥生期の遺物包含層である。土壌試料採取地点ではV層は検出されない。土壌試料は各層ごとに中央部から採取したが、F区のⅢ、Ⅶ、Ⅸ、Ⅺ層のように厚い場合は適宜2または3分割して採取した。

プラント・オパールの大きさは $50\mu\text{m}$ と微小なので、土壌試料採取にあたっては、亀裂の発生していない箇所を選ぶなど、試料が汚染されないように細心の注意が必要である。試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り通常の定量分析を行った。（図1）

図1 プラント・オパール定量分析手順



結果および考察

プラント・オパール分析結果を給源植物中の珪化機動細胞密度（表1）によって植物体重に換算して、図2、図3に示す。単位は、広さ10a（1,000㎡）深さ1cmの土壤中に埋没した植物のうち地上部乾物重（t）で示した。イネについては、地上部乾物重のうちモミ量を推定して斜線で示した。さらにイネでは微量のプラント・オパールが検出されても検討の対象となるので、拡大図を図4、5に示した。

イネだけについて見ると、D-1区では⑥層以外の層から検出された。①層から④層までは下層ほど減少するが、6世紀後半から7世紀の遺物を包含する⑤層で増加する。また、F区でも、VI層までは下層になるほど減少するが、古墳以前の遺物を含むVII層で増加する。なお、少量だがXI層まで検出される事は、注目に値する。

各地で検出された水田遺構土壌のプラント・オパール分析結果を総合すると、イネ粉量に換算して、1t/10a/cmを越える場合は水田遺構の可能性が高い。これに従うと、D-1区では現在の作土層の①層以外に、⑤層も水田土層の可能性が

高い。また、F区では、IV層までとVII層が水田土層と考えられる。しかし、プラント・オパールは耕耘作業などで下層に移動する可能性があり、作土層と断定はできない。土層観察の結果などと総合

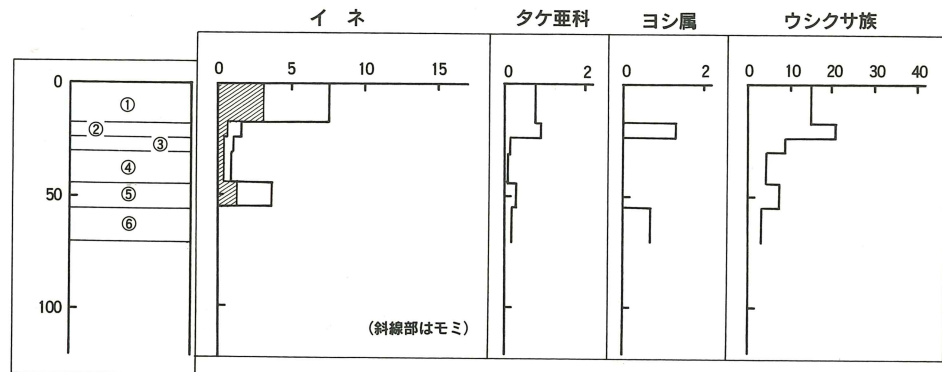


図2 D-1区土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

的に考察すると、D-1区では、③層も作土層の可能性があり、F区では、II層、III下層は水田下層土の可能性

がある。F区では、VIII層や、IX層-1層からも比較的に多量に検出されたが、VII層の下層土となった結果とも考えられる。しかし、検出量は少ないが、IX-3層やIX-2層のイネは直上層よりも多く、上層からの移動の結果とは考えにくい。また、これらの層は、土壌状態の観察結果からは水田とは考えられない。おそらく畑状態でイネが栽培されていた可能性を示すものとして注目したい。

イネ以外では、全ての層ウシクサ族が最も多い。ウシクサ族には、ススキ・チガヤなど路肩や堤防や草原など、やや乾燥した場所に普通のイネ科植物が含まれる。一方、堤防などに見られるササ属を含むタケ亜科や、水分を好むヨシは比較的少ない。これらのほとんどは、洪水などで堆積した土層に初めから含まれていたものであろう。

プラント・オパール分析結果を植物体重に換算した値に土層厚を乗ずると、その層に含まれる植物体重を推定することができる。たとえばD-1⑤層は、3.60t/10a/cm、イネ粉量に換算すると1.26t/10a/cm、層厚が11cmなので13.9t/10aの収穫がえられた計算になる。堆積年代が明らかになれば年間収量の変遷をあとづける手掛かりが得られる。しかし、この計算には注意が必要である。前提条件として、稲刈で収穫するなど機動細胞を含む葉身の全量が圃場に残される場合を想定している。株刈であったとすれば、機動細胞プラント・オパールの含まれる葉身は圃場外に持ち出されるので、実際に収穫されたイネ粉は計算値のおよそ20倍になる。

この度の分析結果で、D-1区⑤層やF区のVII層で分析結果が高かったのは、あるいは穂刈であった可能性が有る。時期はいずれも6世紀後半より古い、あるいは古墳以前と言われ、土色も湿田の可能性を示す青灰色を基調としており、株刈りには適さない。また、稲田条里遺跡に含まれる可能性がある、やや下流の平石遺跡でも、6世紀前半の包含層の青灰色土層が水田作土の可能性が指摘されており、さらに下層からもイネが検出されてい

る。これらの事から、次のような開発史が考えられる。すなわち、弥生時代後期ころには、乾燥していた氾濫原を利用して、一部では畑状態でイネを栽培していたことが考えられる。古墳時代ころには、比較的の水分の多い湿地状況が出現したので、これを利用して比較的広い範囲で稲刈りによる水田を営んでいた。その後、灌漑が行われるようになって株刈りに移行した。何度かの洪水に会いながら今日にいたっている。

分析は、発掘された遺跡の一部の土壤にすぎないので、この推定に対する評価は、今後の研究に待ちたい。

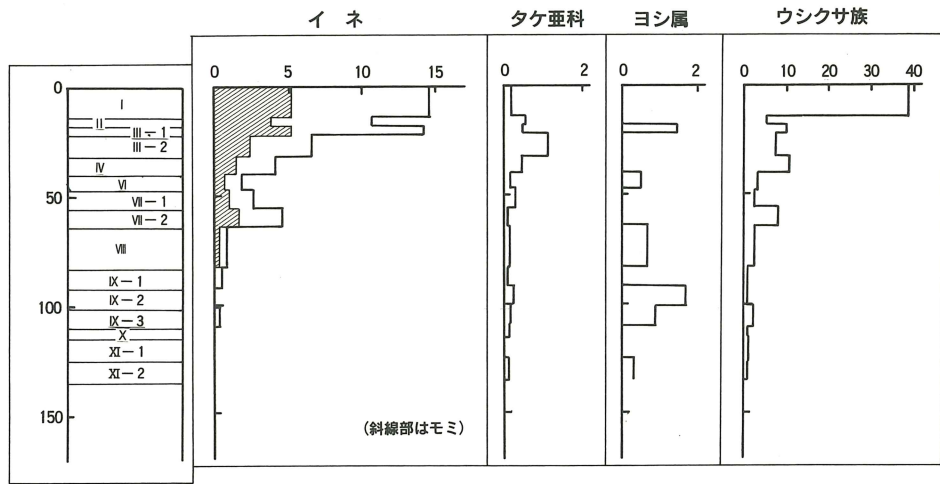


図3 F区土壤のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

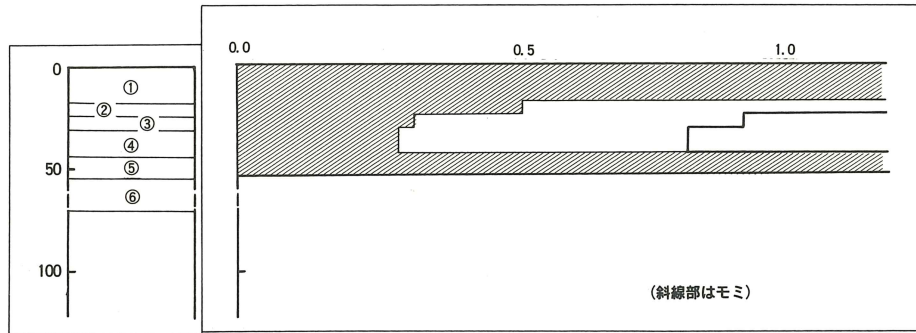


図4 D-1区土壤のプラント・オパール密度から推定したイネ (拡大) (t/10a/cm)

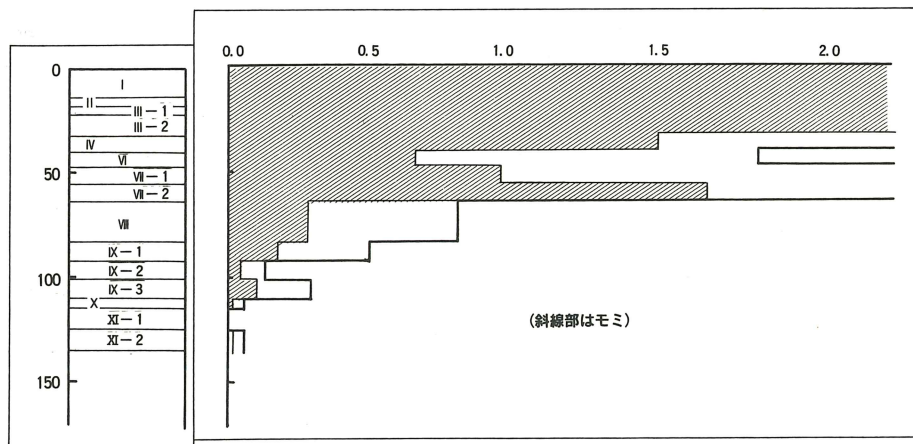


図5 F区土壤のプラント・オパール密度から推定したイネ (拡大) (t/10a/cm)

表 1 植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール 分析分類名	代表植物		植物体中密度 (10^4 個/g)
イネ	イネ	<i>Oriza sativa</i>	3.40
ヨソ属	ヨシ	<i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴキダケ	<i>Pleioblastus Chino</i> <i>var. virides f. pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i>	2.79

付章 2. 「賀来・城遺跡」の中世土器

I 調査のいきさつ

大分県では、1991年度大分県大分市の賀来・^{かどた}門田地区に「県道大分・挾間線」のバイパスを計画した。これまでの県道は住宅と神社・小学校に挟まれており、車の離合、人の歩行に不便であった。この為、賀来神社北東前にある県道の三叉路部から水田地帯を通り、九大線の線路と賀来中学校西側の間を南方向へ通す計画を立て、交通量の増大に対応するねらいがあった。

さてバイパス予定地付近は、1980年の中学校舎建て替えに際して大分市教育委員会が第一次発掘調査を実施している。その結果、弥生時代後期を中心とする大きな環濠集落の存在が明らかとなった他、室町時代（14世紀）頃の掘立建物・井戸が見つかった。しかも隣接地には平安時代から続く「賀来神社」がある他、一帯は中世の有力土豪である「賀来氏」の「館」伝承もあった。また地形的に見ても大分川沿いの緩やかで広い河岸段丘上に位置することなどから、埋蔵文化財の包含が予想された。したがって試掘調査を実施する必要が生じ、1991年にこれを行った。その結果、工事予定地で遺物・遺構の発見があった。

大分県教委委員会と開発部局は、試掘調査結果をもとに取扱いを協議したが、工法変更等による遺跡の現状保存は不可能となった。この為、試掘調査を記録保存のための発掘調査へ切り替えた。

試掘調査と発掘調査は1991年6月10日～同年7月31日に行った。1991年度着工工区の発掘では弥生時代中期、奈良時代前後、鎌倉時代の遺構、遺物が検出された。（綿貫俊一）

II 遺跡の位置と環境

立地環境：賀来・^{しろ}城遺跡のある場所は、大分市西部の金谷迫・野田・松ヶ丘・椿ヶ丘などの丘陵地帯に挟まれた平野部である。このあたりは大分川が大きく蛇行しながら東流しており、左岸を賀来、右岸を小野鶴と現在は呼ばれている。平野部は、大分川と賀来川によって形作られた河岸段丘地帯が発達しており、賀来・城遺跡はこの二河川の合流部に近い微高地上に位置している（第1図）。詳しく見ると、遺跡のある部分と賀来川の間には小さな谷があって、下中島川が東流して大分川に合流する。遺跡の北側にあるこの小さな谷は小規模な水田地帯があり、「堀田」と呼ばれている。堀田の水田地帯は下中島川との比高差はほとんどなく、古い段階の水田経営を考えると、その存在は重要な位置を占めている。下中島川による影響と考えられる地形的に低い部分は、遺跡西方のJR九大線路付近にまで観察される。

遺跡は、東方にある賀来神社、北方に天満神社と下中島川、西方に九大線線路、南方に賀来中学校等に囲まれた位置関係にある。

歴史環境：遺跡の近隣地域においては、今から2万年前の旧石器時代後期から人類居住の痕跡が観察される。その旧石器時代の遺跡として、庄ノ原遺跡群・机張原遺跡が賀来・城遺跡の北方にあるほか、西方に野田山遺跡が国分台地上にある。

縄文時代に入ると、やはり早期の古い遺物が庄ノ原遺跡群・野田山遺跡などの丘陵地帯で点々と見つかる。このほかの縄文時代遺跡ははっきりしないが、弥生時代に入ると、遺跡が再び発見されるようになる。その弥生時代の初頭に位置する遺跡として、荏隈遺跡、植田市遺跡、下黒野遺跡等があり、丹ぬりの壺、突帯紋甕が見つかる。特に荏隈遺跡・植田市遺跡は平野部に位置しており、稲作農耕導入期の遺跡として、総体的立地選択にあたって低地を指向しはじめたことを示唆している。前期の遺跡として植田平石遺跡があり、ゆるやかに立ち上り、口頸部外面と胴部との境界付近に2条の刻目突帯を貼りつけたナデ調整の甕がある。

弥生時代前期末から中期の遺跡としては、賀来・城遺跡・雄城台遺跡・深町遺跡がある。賀来・城は一片の須久式甕が多量に見つかり、雄城台と深町ではそれらが多く、水田開発に伴う稲作農耕の発展期と目される。



第1図 賀来・城遺跡位置図

弥生時代後期になると環濠が伴ったり、独立性台地に立地したり等、戦略的意図さえうかがえる集落が目立ってくる。そうした遺跡に尼ヶ城遺跡・賀来中学校遺跡・雄城台遺跡が見られるようになる。賀来中学校遺跡は賀来・城遺跡の南方に隣接し、独立性台地上との比較から見れば低地形上の僅少集落と言えるが、北に堀田の谷地形・東に大分川・遺跡内に環濠というように割合に堅固な立地を見せている。

古墳時代に入ると、このあたりはさらに活況を示すようになる。庄ノ原台地の蓬莱山古墳群、餅田丘陵の古墳群、中尾や丑殿の古墳、小野鶴横穴墓群等々のほか、大分市西部における多くの当該期遺跡が展開している。賀来・城遺跡でも須恵器が見つかるほか、南側の賀来中学校遺跡では古墳時代初頭の溝・住居が見つかる。

奈良時代には大分川の左岸はすでに成立していた豊後国の中枢となる。賀来・城遺跡でも8世紀後半の須恵器類が見つかるほか、遺跡の南方に位置する国分地区には「豊後国分寺」が建立される。このころには太宰府から豊後国府にのびる古代官道が、中尾の丘陵から中島（賀来・城遺跡の北方）方面を通り、国府方面へ至っていた。更に賀来・城遺跡の南方約1.5kmの距離がある豊後国分寺からの道が遺跡の北方で官道に合流していたのは当然であろう。

平安時代に入ると、承和3年（836）の創建伝承がある柞原八幡宮と古代官道を結ぶ道路ができたと考えられ、後の善神王社（現賀来神社）道の前身となったことが想定できる。

これまで記述してきたことから、柞原八幡宮と国分寺を結ぶ道に、豊後国府と太宰府を結んだ古代官道がクロスした交通上の要に遺跡付近が当たっていたと言えよう。二宮好雄氏は、平安時代の保延年間頃（1134年代～）までは今の賀来川は角前下から餅田集落、市集落の地を東流し、片面集落下で大きく南に曲がって尼ヶ瀬集落西で大分川に合流していた。この川の北側の庄ノ原台地に属する部分・集落が神領賀来荘で、川の南側は阿南郷であったが、保延5年（1139年）以後、この賀来川が現在の位置に近い流路となったため、この新しい賀来川と旧賀来川の阿南郷の地が地形的に賀来荘側についていたとしている。つまりこの地が平丸名と称され、旧賀来川跡も耕地化し、地頭職として賀来氏が入った。こうしたいきさつから阿南荘平丸名が賀来平丸となり、旧賀来川から賀来となったことから庄ノ原・柞原方面の元々の賀来より地名呼称上優位となった。

上述のようないきさつを有する賀来は、鳥羽院政の頃（大治4年・1129－保元元年・1156）由原大宮司大神広房が勅勘による領家職を没収される。その後、弘安凶田帳（弘安8年・1285）によれば賀来本荘式百町の領家は一條前左大将家室家、賀来平丸名三拾町の領家は山法師備後幸秀となり、地頭はいずれも賀来五郎惟永法名願連とある。しかし実際には賀来惟頼の子小次郎惟綱が貞応2年（1224）はじめて地頭職の下文を関東より得ている。ところが柞原八幡宮大宮司平経妙申状案（訴状）によると、治承3（1179）年佐伯三郎惟家なる人物が同宮領賀来荘の下司職に任命されており、その後子の惟頼→惟綱→惟永と相伝されている。このことは佐伯氏・賀来氏が賀来荘や阿南郷に12世紀後半頃から影響力を備え始めたことが判る。賀来にある善神王宮（現在の賀来神社）はこのころ（天福元年・1235）までには勧請されていたようである。

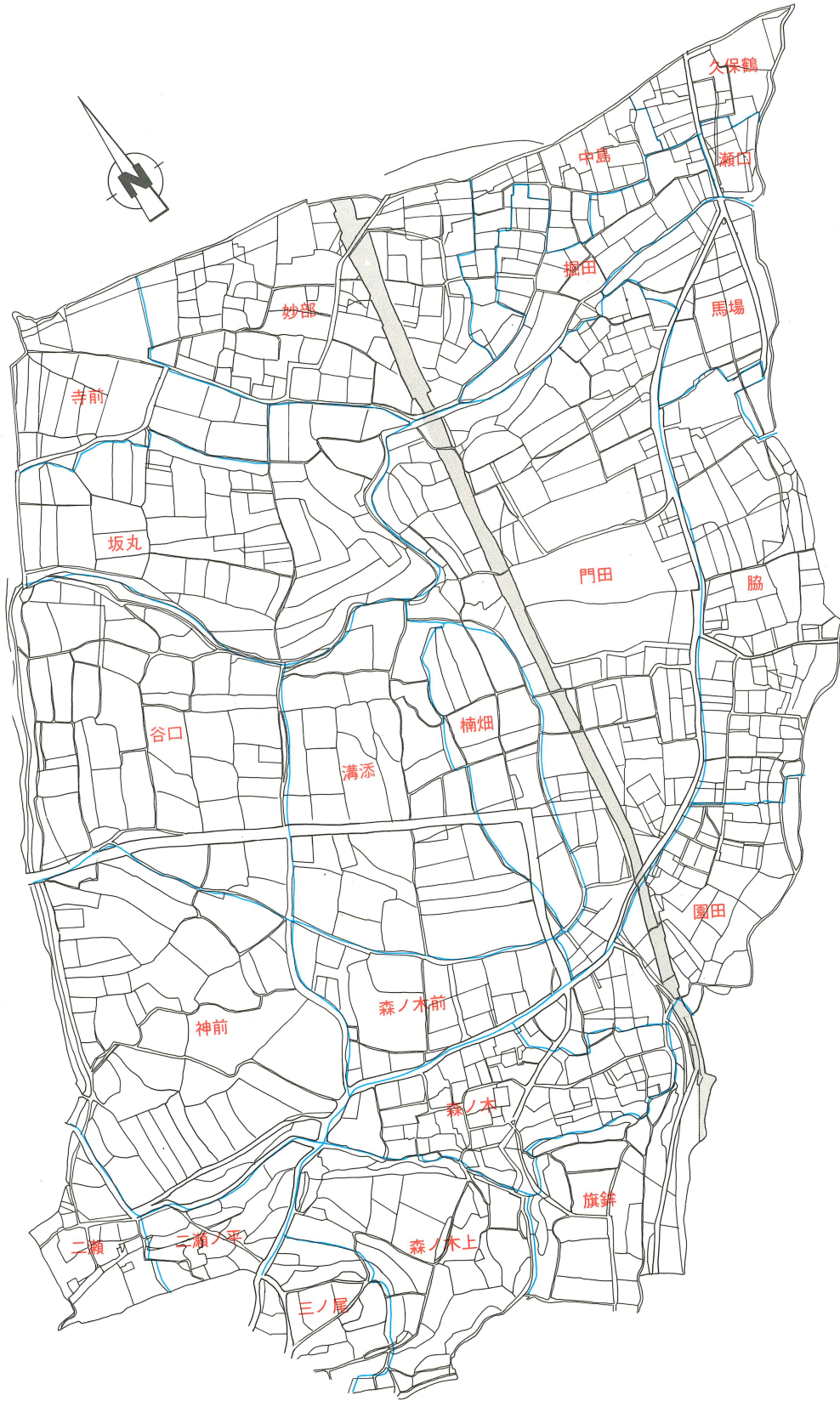
南北朝時代に入ると豊後国守護職を持つ大友氏が豊後一の宮として由原宮を保護するようになり、賀来氏も臣従下する。賀来氏は享禄3（1529）年の大友姓氏の乱によって賀来地頭賀来左衛門大輔鑑綱が流亡の旅に出ており、一時なりをひそめる。しかし鑑綱は大友義鑑により許され由原宮の大宮司となっている。更に江戸時代に入っても柞原八幡宮（由原宮）の神職を賀来氏がつとめていることが「賀来神社志」に記載されていることから判る。また賀来氏の一族である安部氏が賀来村庄屋兼賀来郷総庄屋となったことと、歴代藩主の崇敬により、柞原八幡宮と善神王宮（賀来神社）間の祭礼は盛んであったようである。

上述してきたようないきさつもあって、遺跡付近（賀来神社周辺）と柞原八幡宮周辺には両社の神職・供僧の住居及び賀来氏館が存在したことを示唆するように、現在遺跡周辺に居住する人々の中には「昔、お坊さんが住んでいた」という伝承をもつ人さえいた。

現在、遺跡周辺の北西約400mに賀来氏の菩提寺であったとも伝えられる円成寺が位置しており、往時をしのばせる五輪塔がある。この他、遺跡の北約60mの地点に天満社があり、境内に賀来氏の末である賀来某氏（京都在住）が明治年間に設置した「賀来氏館跡」の碑がある。

（綿貫）

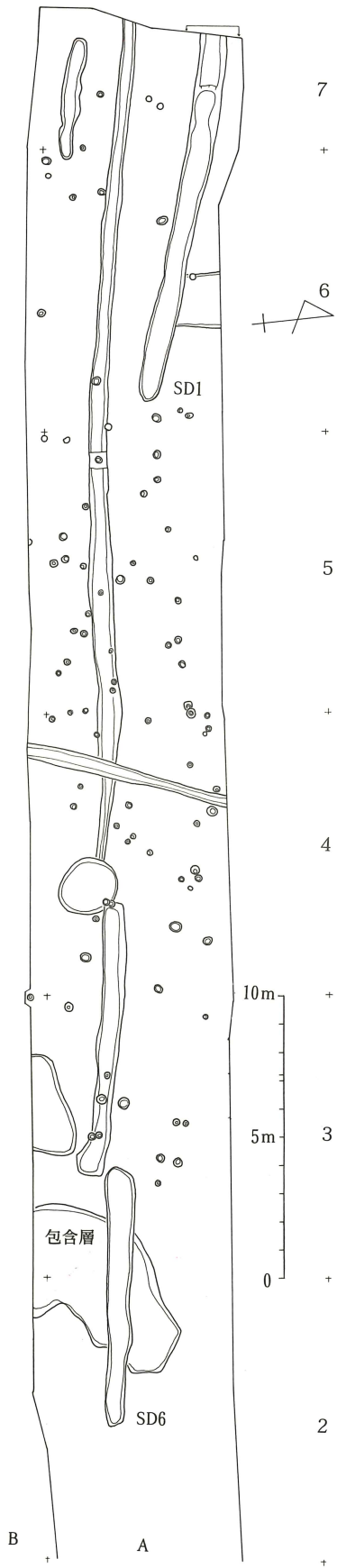
参考文献 二宮好雄 1963「賀来善神王宮」賀来神社



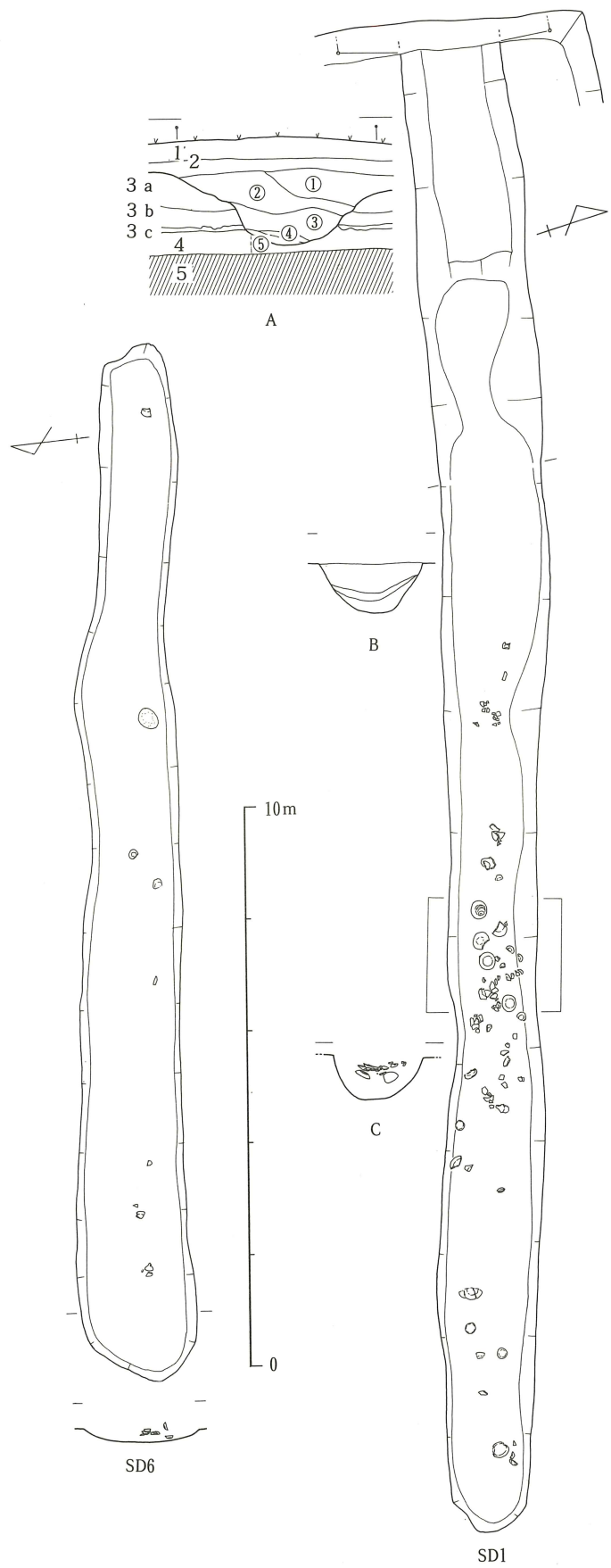
第2図 賀来・城遺跡周辺地割図



第 3 図 賀来・城遺跡発掘区設定及び主要遺構分布図



第4図 主要遺構分布図



第5図 中世の溝状遺構図

Ⅲ 調査の概要

(1) 発掘区の設定

発掘に先がけて、第3図に示すよう升目を決め、その設定を行なった。まず今年度工事予定道路幅に軸線を平行させるように東から西へ1、2、3…、北から南へA、B…と区割を設定した。なお、南北方向の区割線は磁北に一致しない。

(2) 地層

発掘調査区の地層堆積は、第5図に示す1～6層によって構成される。

第1層は灰黒色粘質土層である。この層は発掘開始直前まで水田として利用された耕作土であり、発掘区域外にはなお残存している。第2層は黄茶褐色粘質土である。第1層直下に均一に存在する。第1層の水田耕作層に伴う水田碁盤層、いわゆる水田床土である。第3層は赤褐色の粘土である。この面が遺構検出面である。第3b層は赤褐色粘土であるが、3aよりは軟質である。第3cは厚さが約3cmの暗灰色粘土である。この3c層は洪水に伴う粘土である。第4層は厚さが約20cmの暗黒色土で、やや色の濃い上部と色の薄い下部に区分できる。この4層は旧風化層である。第5層は暗灰色粘土で、赤色酸化粒が縦縞状に短く延る状況であった。

Ⅳ 遺構と遺物

今回の発掘で検出した遺構は、堅穴状遺構1軒、溝状遺構13条、井戸跡1基である。見つかった遺物の内容は弥生時代中期から近世にかけて断続に連続した状況を示す。以下においては検出遺構の説明と各遺構の時期決定の指標となる遺物について詳述していくが、実質的に中世の2遺構と古墳時代に属する小規模な包含層から多量の土器が見つかるだけで、ほかの遺構からはあまり見つからない。したがって中世の2遺構と小規模包含層の遺構・遺物が記述の中心となる。

一方、上述した遺構は発掘調査区の全域に分布している(第3図)。その中で目立つのは溝である。それらのほとんどすべてが、現在の水田地帯に残されている畦畔の方向に並行していることが特別に注意されることである。溝の多くは流入した土から見て江戸時代から造られたようであるが、明らかに中世初期に溯る上述の2遺構の方向も現代水田の地割方向と一致している。

(1) 包含層

発掘調査区の東部にあたるA2区、A3区に位置する。包含層は長軸6.20m、短軸3.50mで、南側の発掘区域外にのびる。当初、堅穴式住居跡とも考えたが、平面形や断面観察の検討から包含層であると見た(第4図)。見つかった土器は古墳時代初頭の甕を主体とし、壺・鉢・高坏・甌等がある。その他、若干の須恵器が回収されている。これらの遺物の中には完形品や完形品に近いものはなく、その全てが大小の破片である。

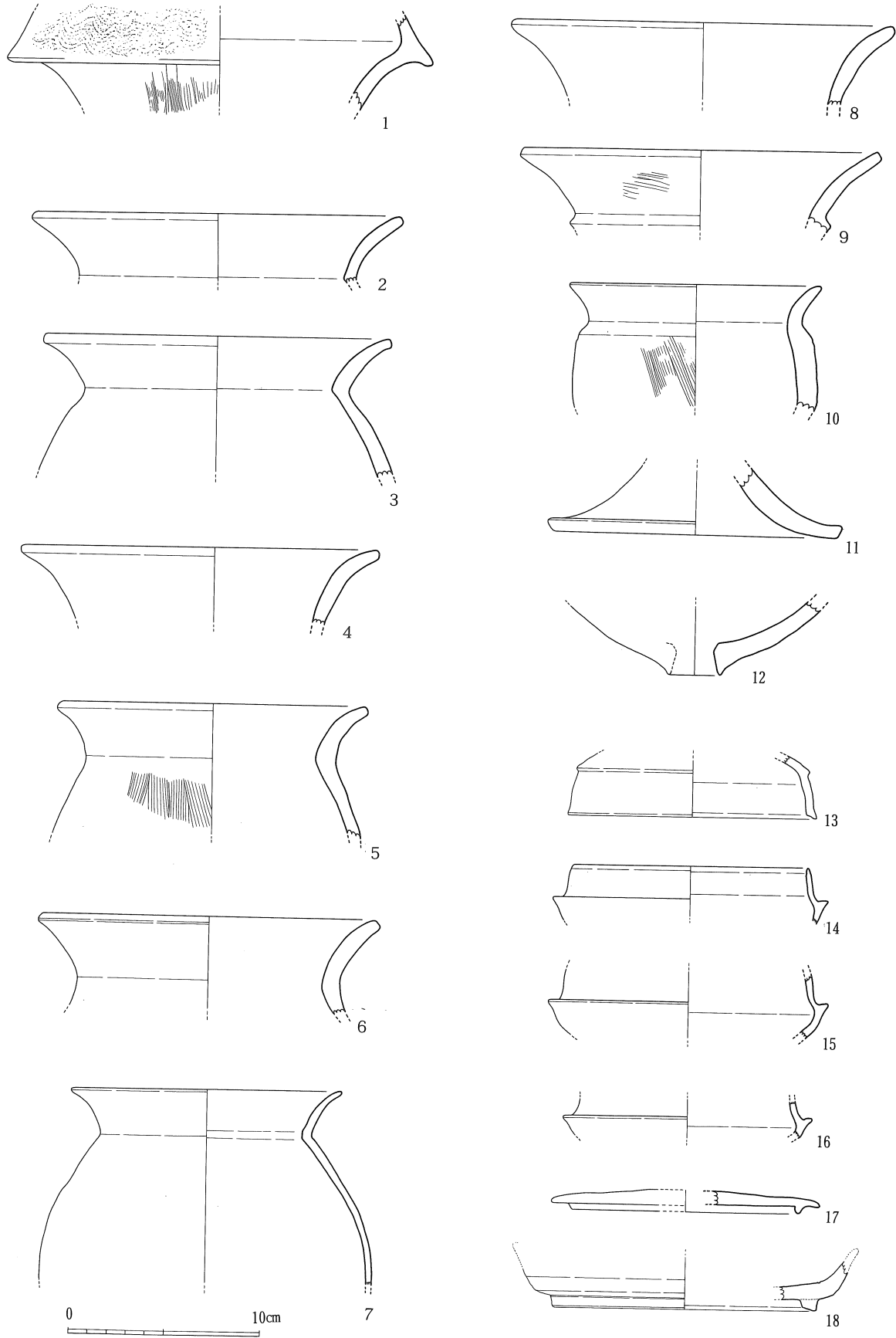
壺 壺には複合口縁部もつ安国寺系統の例がある(第6図)。

甕 I類 くびれ気味に内湾する胴部上半から大きく外半する例で、胴部と口縁の内面側境界に比較的明瞭な稜線がある例と(第6図2・3・7)、明瞭でない稜線の例がある(第6図4～6、8)。II類 全体の器形ははっきりしないが、大分市教育委員会による近隣地点の類似資料の報告では「胴部のほぼ中位に最大径を持ち、口径が胴部最大径と同程度あるいは口径が胴部最大径を上回る。」とある(坪根編1992)。この器形をベースとし、口縁部直下に一条の三角突帯を貼付する例である(第6図1)。第III類 ほぼ上方に立ち上がる胴部で、上部で短く内傾した後に口縁部も外反し開く例である(第6図10)。外面側胴部上半に稜線が認められる。

高坏 脚部で、段を有しないでゆるやかに裾部に至る例である(第6図11)。裾端部はコノ字形を示す。

甌 底部から約20°の角度で大きく開きながら立ち上がる例のようである(第6図12)。

古墳時代の須恵器 第6図13は坏蓋である。胎土は緻密、焼成良好で色調は赤褐色である。天井部との境の稜から丸味をもち外傾する丸口径は推定復元で12.9cmであろう。第6図14～16は坏身である。口径は14が推定12.2cm、15が推定12.8cm前後、16が推定11.2cm前後で、いずれも胎土が緻密、焼成良好、色調は赤褐色である。以上



第6図 弥生・古墳・古代の遺物

見てきた坏類は、おおむね小田富士雄編年の3A期に位置づけられよう。

(2) その他の遺構と遺物

歴史時代の須恵器、第6図17は蓋で、A10区の柱穴1から見つかった。口径は推定約14cm前後である。小破片である為、立ち上がり角度はややはっきりしない。第6図18は盤で、上述した包含層(A3区)に由来する可能性がその注記からうかがえるが、取上げの際の不手際からはっきりしない。底径は推定約13.8cm前後である。これらはいずれも器形から8世紀後半から9世紀にかけての例と思われる。

(3) SDI

発掘調査区の中央付近(A6、A7)北側をほぼ北壁に並行する溝である。掘削方向N-75°-Wにとっている。西端はA7区の未発掘部に延び、東端はA6区の東よりで収束している(第3図)。この遺構検出付近の平均的レベル(15.40m)で幅が0.90m、現存深度が約0.45mの規模で(第5図)、約13mにわたり検出した。ところが溝底までの深度を西端にある未発掘部分の壁面で検討すると0.65mの深さがあるほか、最上面での溝幅は約1.90mもあった(第5図A)。このことは本来第5層上面するべきところを、色あい等の理由で平面的に遺構検出をしやすくするために第3層下半~第4層上半付近まで掘り下げたことに由来している。

さて埋土の流入方向は南側からであることが未発掘区断面に表された堆積角度から考えられる(第5図A)。この断面から溝埋土は大きく5層に大別でき、上層から順位①層~⑤層に区分した。しかし場所によっては溝内埋土の堆積状況が若干異なるようである。たとえば未発掘区の断面から約4m離れた場所では、溝上半が大きく削平されてはいるものの、堆積層が3枚で、中層は炭化物の多い層である(第5図B)。

検出長は約13mであるが、この中央付近から東端までの溝内から弥生土器破片、輸入陶磁器破片、完形品を含む土師器が見つかっている。特に完形品の多い土師器とその量から見て、溝の掘削に近接する頃の投棄が推定できる例であるが、その垂直分布は溝内中位~上位の範囲である(第5図C)。しかし堆積状態のよい未発掘区断面の③層に土師器のレベルが相当することから(第5図A)、溝掘込み面からの深度は-0.30m~-0.50mに相当することが判る。

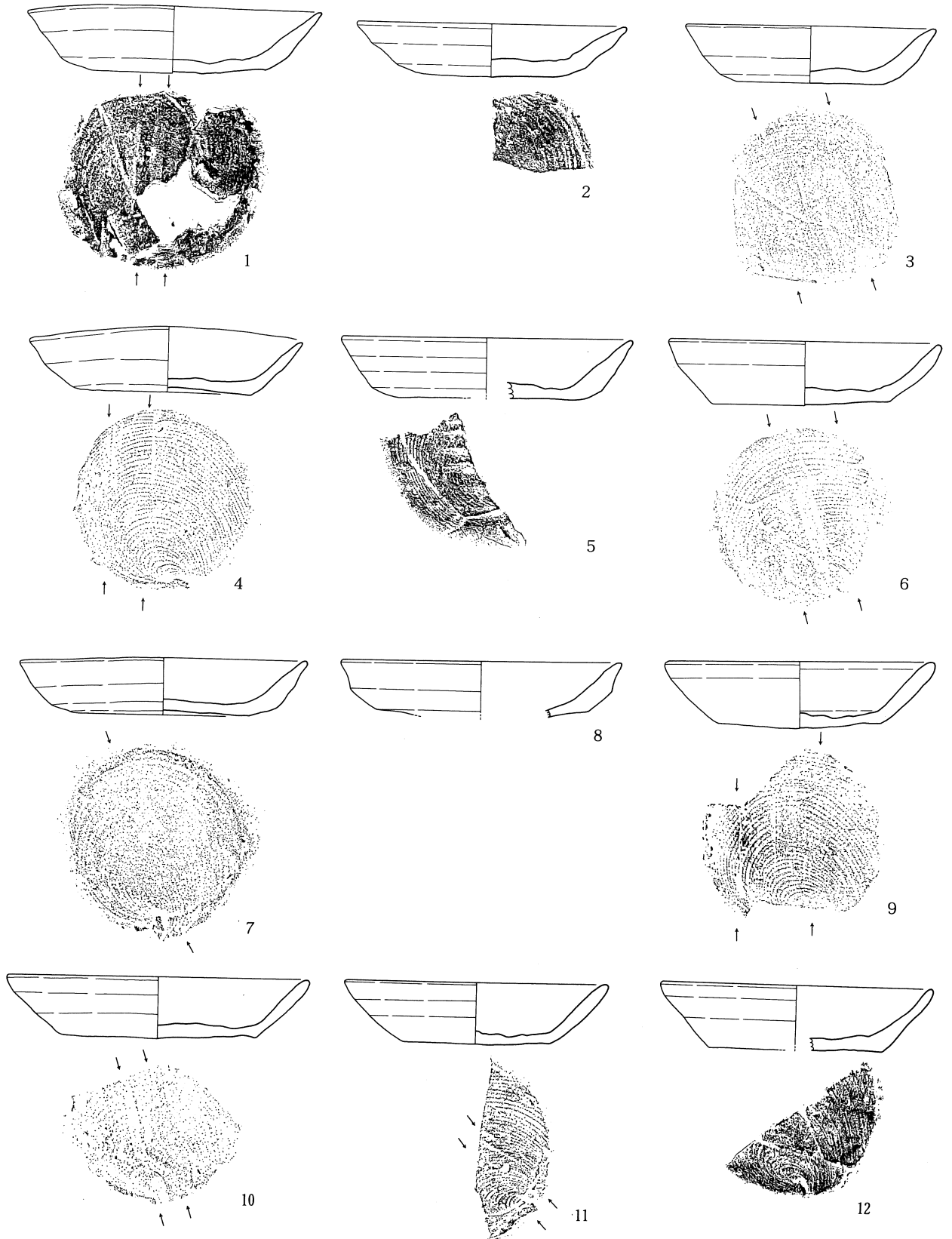
土師質土器 坏類は器形の違いによって次の三つに区分できる。また、色調・焼成・素地・精粗などによっても区分できるが、これらは器形という属性の、下位に位置する属性とし、それぞれ記述をしたい。

第1類(第7図1~5、7、8) 底部は全て糸切り離しで、外方に体部がほぼ直線的に開き、端部が尖り気味になる。口径は13cm台に1点、14cm台に3点、15cm台に3点あるが、13cm第の1点は残存率 $\frac{1}{4}$ でやや信頼度が低い。器高は2.8cmから3.5cmの間に全例が入る。口径の開きの角度は40°付近に2点、46°から49°間に4点、55°に1点である。46°から49°間に集中する傾向が見てとれる。見込みの調整は一定方向のナデによるものと(第7図1)、体部内面側からのヨコナデが見込み部分まで連続するものがある。

第2類(第7図9、11、12、第8図1~4) 底部は全て糸切り離しで、外方に体部がほぼ直線的に開き、端部を丸くおさめる。口径は14cm~14.5cmまでに3点、15cm~15.7cmまでに4点ある。器高は3.2cm~3.5cm間に全点が入る。口径の開きの角度は46°~51°の間に5点、53°と56°に各1点ある。底径は7cm台後半に1点、8cm台に1点、9cm台に2点、10cm台に3点ある。

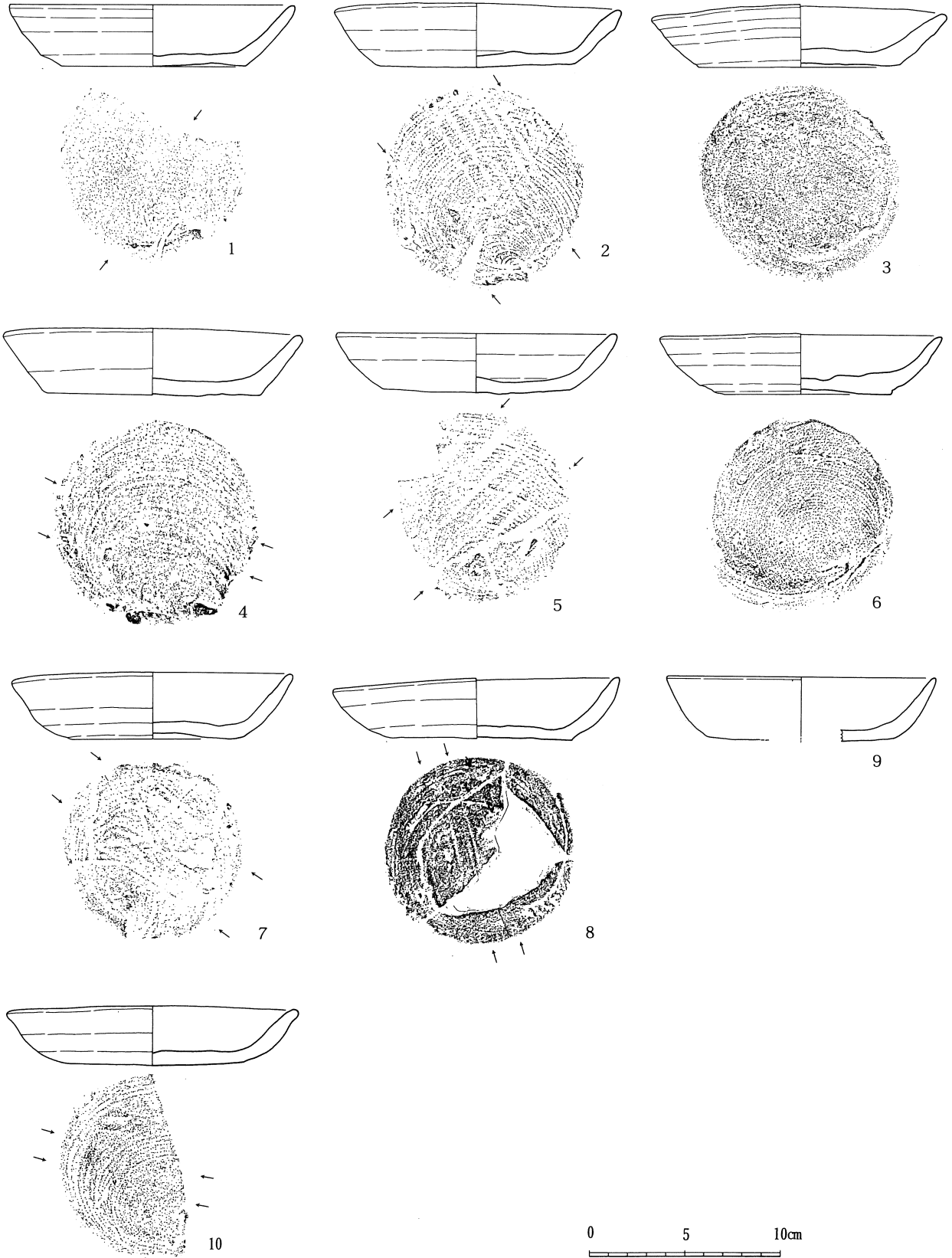
第3類(第7図6、第8図5~10) 底部は全て糸切り離しで、体部が内湾しながら外方に開き、端部を小さく丸くおさめる。口径は残存率の点でやや信頼度が低い例を除くと(第8図9)、14.6cmから15.3cmまでに6点が入る。口径の開き角度は43°、52°、56°に各1点ずつあり、48°と50°間にやや集中するように4点ある。

これまで第1類から第3類に3分して記述してきたが、法量的に大きな違いはなかった。口径を見ると15cmを分布の中心としている。器高は3cmから3.5cmまでの間にそのほとんどが入る。角度は前述したように大きな領域にまたがって分布している。これはわずかな器形の開きが異なっても角度が違ってくことと、同一個体においても器高上のゆがみなどから角度の違いが出ることにも原因があろう。しかしおおむね46°から52°までの間に21例中14例が分布する状況があり、これを坏類角度の特徴と見ることができるといえる。底径は7cm後半から11cm台前半にかけての領域に分布するが、このうち9cm台には10例が分布している。9cm台を中心とした底径をもつ坏群と



第7図 土師質土器 ①

0 5 10cm



第8図 土師質土器 ②

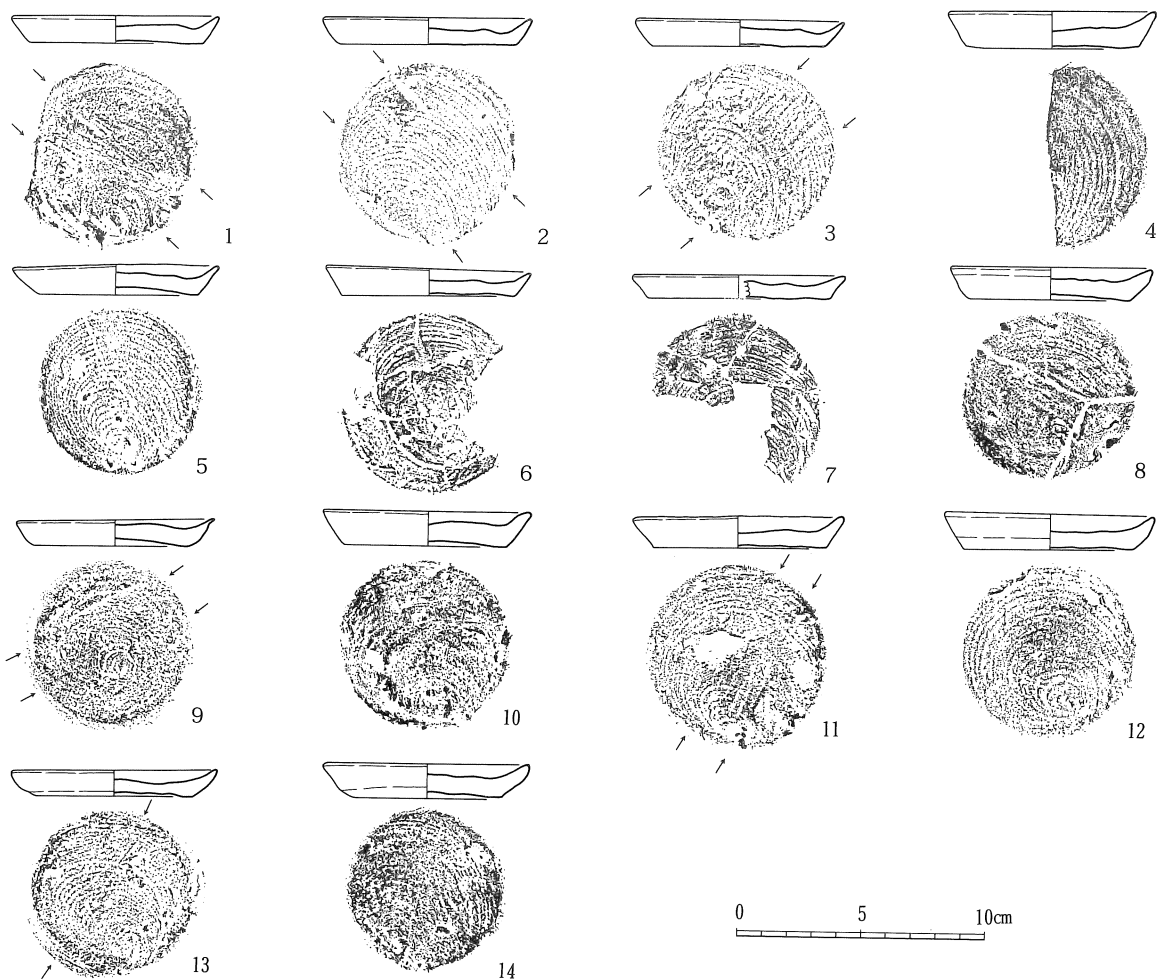
言えようか。

小皿類は器形の違いによって次の三つに区分できる。また、色調・焼成・素地・精粗などによっても区分できるが、これらは器形という属性の下位に位置する属性とし、それぞれ記述をしたい。

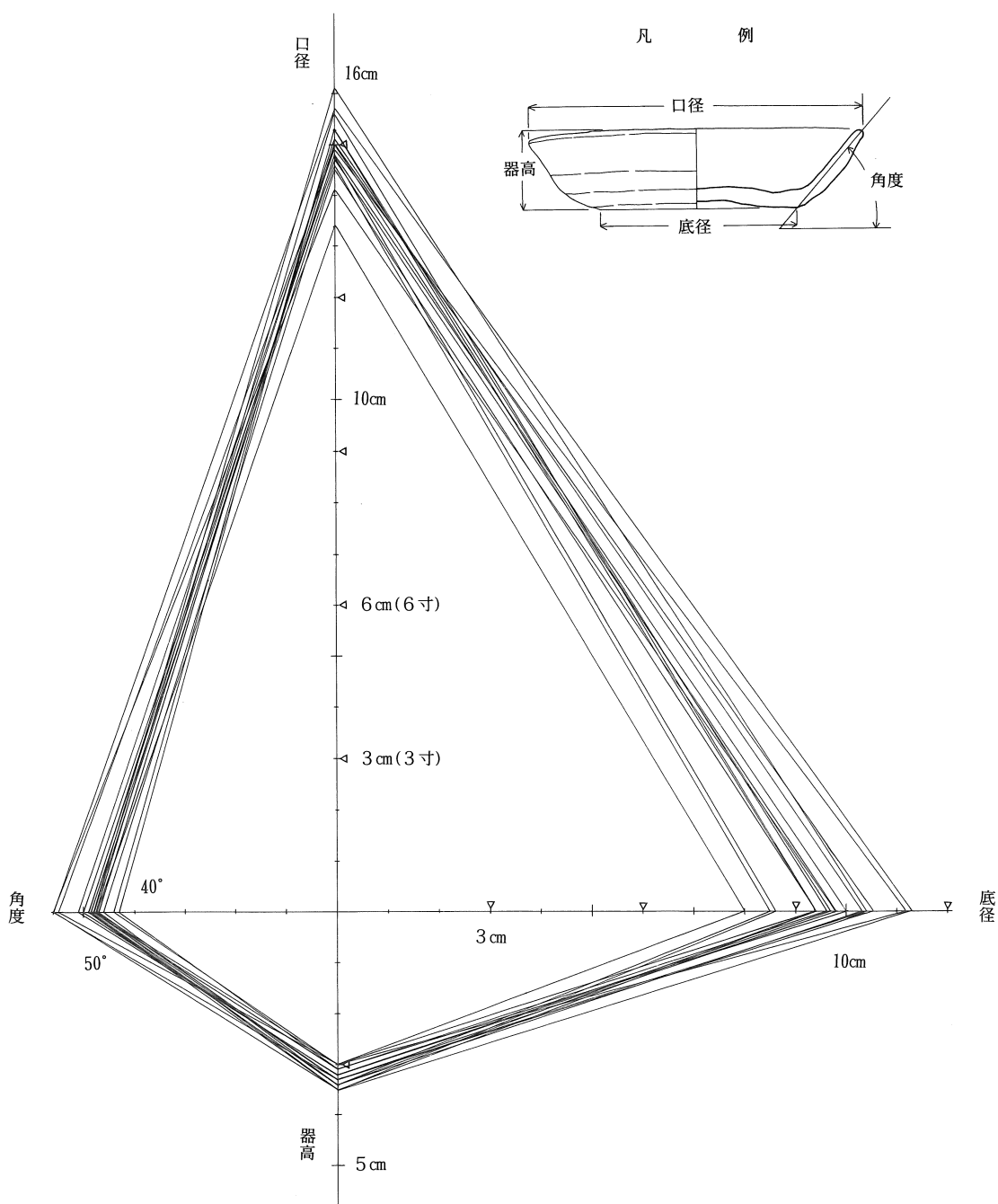
第1類（第9図1、3～9、11）底部は全て糸切り離しで、外方に尖り気味の口縁部が短くのびる。口径は8.0cmと8.5cmという5mm間に全て収まる。更に詳しく言えば8.3cmから8.5cmの3mm間に9例中の7例が収まる。器高は0.9cmから1.5cmの間に9例全てが入る。これは底部を糸切り離しの際の角度によって平面に小皿を置いたときの器高差が同一個体において出てくることに原因の一端がある。口縁の開きの角度は49°と64°に離れて分布する2例のほかは55°から60°までの領域に7例が集中する傾向がある。底径は6.2cmから7.0cmまでの間に7例が集中する。この他7.3cmに1例がある。

第2類（第9図13、14）底部は全て糸切り離しで、外方に尖り気味の口縁部が短く延びるが、第1類に較べて端部傾斜角がやや開き気味である。体部外面はわずかに内弯し、体部外面から見込み部にかけての境界がはっきりしない特徴をもつ。口径は2例とも8.3cm、器高は1cmと1.4cm、角度がいずれも47.75°、底径は6.35cmと5.9cmなどの法量を有する。第1類に較べて第2類はみつかった量が少ないが、より古い時期に似た形を有する例がある。

第3類（第9図12）1例だけで底部が糸切り離しである。外方に尖り気味の口縁部が短く延びる点は第1類と第2類に類似する。しかし体部の開きの角度は第1類と同じであるが、体部外面が内弯することと体部内面と見込みの境界がはっきりしない点は第2類の属性でもある。第3類は第1類と第2類の特徴を合せ持った器形であ



第9図 土師質土器 ③ 小皿



第10図 土師質土器 坏 法量グラフ

る。なお、法量は第1類と第2類に比較しても違和感はない。

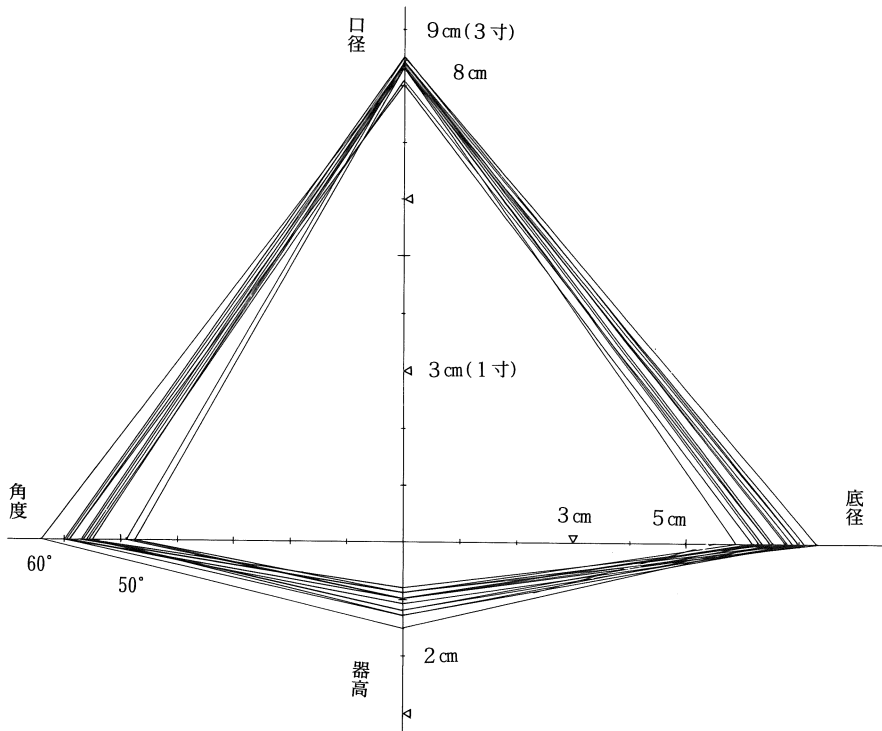
白磁・青磁

同暗窯系青磁が3片と定・邢窯刑白磁が1片でている。なお分類は森田勉氏の分類を用いている（森田ほか1998）。

同安窯系青磁碗 1類 1b（第12図1） 底部を欠くが、類例から台形状の厚い高台を有し、体部が高台部からやや内弯気味に外上方へ立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する例である内面に沈線を入れ、外面には櫛目を有する。口径は17cmである。

青磁皿 1類 1a（第12図7） 体部を欠く底部のみの皿である。体部下半から底部にかけては施釉されない。貫入が入る。底径3.5cm

その他の青磁皿（第12図8） 底部を欠く皿であるが、口縁よりで内弯気味に立ち上がる。残存部分にうすい



第11図 土師質土器 小皿法量グラフ

釉が前面にかかり、貫入が入る。体部内面に片彫りの段がある。色調・手法からみて同安窯系とも考えられるが、森田・横田分類のどれに該当するのか判断できなかった。

白磁椀IV類 1・a (第12図6) 体部を欠く底部のみの椀であるが、その特徴から玉縁口縁の白磁椀と推定される。高台は厚く、削り出しも若干である。なお内面に沈線状の段を有する。定窯・邢窯に由来する。

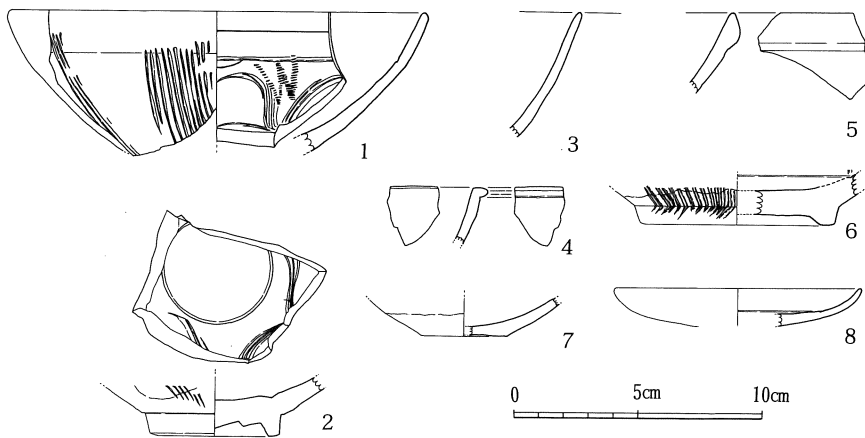
(4) SD 6

発掘調査区は南東方向に延びており、この端部付近

のA2区とA3区をまたぐように東西方向を地割に沿うように位置している。掘削方向N-85°-Wにとっている。この遺構検出付近の平均的レベル15.40mで幅1.0m、現存深度約0.10mの規模で(第5図)、約10mにわたり検出した。しかし実際には遺構検出作業によってSD2の上部は既に削られており、SD1と同じように元来は20cm程高い部分に掘り込み面のあったことが推定できる。

遺物類は弥生土器の量が多く、中世の土師器類はほぼ完形に近い例を含む数点がある。弥生土器が多いのは、SD6が弥生土器を多量に含む包含層を横切る形で掘られていることに原因している。中世の土師器は溝底より数センチ浮いた状況で見つかっており、溝が掘削・使用された時期に近い遺物である。

土師質土器 坏類と小皿類がある。それらはSD1の属性に極めて近く、その分類の中に収まるものである。坏は図示したものによれば(第7図10)、口径が16.1cm、器高が3.3cm、口縁の角度が48°、底径が10.4cmの法量を示す。これらはSD1で見つかった坏の法量に照らしても無理なく理解でき、器形も第2類の典型例に相当する。小皿は2例図示している。ひとつは口径8.4cm、器高1cm、角度59.5°、底径7.1cmの法量である(第9図10)。2つの小皿はSD1の小皿分類では第1類に相当し、法量もSD1のものとの違和感はない。



第12図 青磁・白磁

種 別	挿図番号	口 径			器 高		角 度												底 径											
		14cm	15cm	16cm	3 cm	4 cm	40°	41°	42°	43°	44°	45°	46°	47°	48°	49°	50°	51°	52°	53°	54°	55°	56°	57°	58°	7 cm	8 cm	9 cm	10cm	11cm
土 師 質 土 器 第1類 SD1	7-1																													
	7-2																													
	7-3																													
	7-4																													
	7-5																													
	7-6																													
	7-7																													
	7-8																													
	7-9																													
	7-10																													
土 師 質 土 器 第2類 SD1	7-11																													
	7-12																													
	7-1																													
	7-2																													
土 師 質 土 器 第3類 SD1	7-3																													
	7-4																													
	7-10																													
	SD6																													
土 師 質 土 器 第3類 SD1	8-6																													
	8-5																													
	8-6																													
	8-7																													
	8-8																													
	8-9																													
8-10																														

種 別	挿図番号	口 径		器 高		角 度												底 径													
		8 cm	9 cm	1 cm	2 cm	40°	41°	42°	43°	44°	45°	46°	47°	48°	49°	50°	51°	52°	53°	54°	55°	56°	57°	58°	59°	60°	61°	62°	63°	64°	6 cm
土 師 質 土 器 第1類 SD1	9-1																														
	9-2																														
	9-3																														
	9-4																														
	9-5																														
	9-6																														
	9-7																														
	9-8																														
	9-9																														
	9-11																														
	土 師 質 土 器 小 皿 SD6	9-2																													
9-10																															
9-11																															
第2類 SD1	9-13																														
	9-14																														
第3類 SD1	9-12																														

第13図 土師質土器 法量組成

白磁・青磁 同安窯系青磁が1片と白磁類が2片ででている。前項目と同様に分類は森田勉氏の分類を用いる。
 青磁椀Ⅲ類 1c (第12図2) 体部を欠くが、櫛状の施文具およびヘラ状の施文具により花文を施すことから見て同安窯系青磁椀Ⅲ類 1c に相当しよう。

白磁椀Ⅴ類・1? (第12図3) 体部破片である。外面は口縁端部近くまでヘラ削りしている。口縁部に向かって外上方に延び、端部は丸く収める。胎土は灰色の強い灰白色である。

白磁椀Ⅳ類 (第12図5) 口縁部破片であるため細分類の所属は判らない。口縁が玉縁であることから見ても定・邢窯系の椀であることがわかる。

(5) 土師質土器の器形以外の特徴

胎土 この点については表に示しているとおりでであるが、本遺跡で見つかった土師質土器には共通する特徴的な胎土がある。今、土師質土器の胎土を列記すると、斜長石・角閃石・赤色粒・金雲母・白色粒が含まれていた。このうち金雲母・赤色粒を除く粒子は、普遍的に粘土中に含まれる場合が多いようで、様々な地域と時期の土器に観察されることが多い。特に角閃石粒の場合は含まれていない土器を探すほうが困難であろう。したがって賀来・城遺跡の土器を特徴づける重要なものは赤色粒と金雲母ということになる。

赤色粒と金雲母は、混和材として意識的にまぜたとするほどの量は観察されていない。おそらく原料である粘土に元々含まれていたと考えるのが自然な量である。したがってそれらが「含まれている、含まれていない」は土師質土器生産集団～生産場所の違いを示していることが予想される。また角閃石や細砂粒をほとんど含んでいない胎土と、多く含む胎土の場合もあり、生産地の違いを示すものといえよう。

以上のことがらは表に示す通りであり (第1表)、以下にまとめてみたい。

第 1 表 土師質土器 - 坏 - の属性観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土区 出土 道	器 種	残 存 率	色 調 系	胎 土	色 調	器 面 調 整		底 部 板 目 丘 痕	法 量 (cm)				備 考
								内 面	外 面		口 径	器 高	角 度	底 径	
溝1-22、23	7図1	溝1	土師器 坏	1/2	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、金雲母	黄橙色	ヨコナデ 見込・方向 ナデ	ヨコナデ	○	15.6	3.5	47.5°	9.4	右回転糸切り 焼成良好
溝1-	7図2	溝1	土師器 坏		白系1	斜長石、角閃石 赤色粒	淡黄色	回転ナデ、 見込・一定 方向ナデ	ヨコナデ		14.4	2.8	39.5°	8.1	右回転糸切り 焼成良好
溝1-29	7図2	溝1	土師器 坏	1/4	白系1	斜長石 角閃石粒若干	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	13.4	3.0	47.5°		右回転糸切り 焼成良好
溝1-6	7図4	溝1	土師器 坏	ほぼ 完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、微量の金 雲母	浅黄橙色	回転ナデ 見込・一方 向ナデ	ヨコナデ	○	14.0 14.8	2.6 3.4	46°	9.4	右回転糸切り 焼成良好
溝1-	7図5	溝1	土師器 坏	1/4		斜長石粒 角閃石粒若干	にぶい 黄橙色	回転ナデ	ヘラ削り後 ヨコナデ	○	15.5	3.2	49°	10.1	右回転糸切り 焼成良好、ひずみ大
溝1-18	7図6	溝1	土師器 坏	2/3	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、微量金雲 母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	14.6	3.4	48.5°	9.5	右回転糸切り 焼成良好
溝1-20	7図7	溝1	土師器 坏	完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	15.0 15.3	2.7 3.0	44°	9.4	右回転糸切り 焼成良好
溝1-	7図8	溝1	土師器 坏	1/5	白系1	斜長石粒、角閃石 粒、金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ		14.9	(3.0)	55°	11.2	回転糸切り 焼成良好
溝1-	7図9	溝1A-6	土師器 坏	1/4	白系1	角閃石粒 金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	14.4	3.5	50°	8.7	右回転糸切り 焼成良好
溝6-	7図10	溝1	土師器 坏	2/3	白系1	斜長石、角閃石白 色細粒、赤色粒、 金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	16.1	3.3	48°	10.4	右回転糸切り 焼成良好
溝1-	7図11	溝1	土師器 坏	1/4	白系1	角閃石粒 斜長石粒	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	14.0	3.2	46°	7.8	右回転糸切り 焼成良好
溝1-	7図12	溝1A-6	土師器 坏	1/3	白系1	白色粒、赤色粒 金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ		14.5	3.5	53.5°	9.2	右回転糸切り 焼成良好
溝1-36	8図1	溝1	土師器 坏	1/2	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ		15.0	3.2	51°	9.7	右回転糸切り 焼成良好
溝1-7	8図2	溝1A-6	土師器 坏	ほぼ 完形	白系1	角閃石、赤色粒 金雲母	浅黄橙色	回転ナデ 見込・一方 向ナデ	ヨコナデ	○	15.1	2.8 3.4	49°	10.3	右回転糸切り 焼成良好
溝1-49	8図3	溝1	土師器 坏	完形	白系1	斜長石多量 角閃石、赤色粒	にぶい褐色	回転ナデ	ヨコナデ	○	14.4 15.5	2.2 3.3	47°	10.55	右回転糸切り ゆがみ大、焼成良好
溝1-41	8図4	溝1	土師器 坏	1/3	白系1	角閃石、斜長石 赤色粒、微量金雲 母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	15.7	3.1 3.5	56°	11.3	右回転糸切り 焼成良好
溝1-1	8図5	溝1	土師器	1/3	白系1	角閃石、斜長石 赤色粒、金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	14.7	3.2	50°	9.8	右回転糸切り 焼成良好
溝1-8	8図6	溝1	土師器 坏	完形	赤系1	白色細粒、斜長石 大型赤色粒	明赤褐色	回転ナデ	ヨコナデ		14.8	3.1	48°	9.0	右回転糸切り 焼成良好、砂粒ほとんどなし
溝1-5	8図7	溝1	土師器 坏	完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、金雲母	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	14.7 15.0	3.0 3.5	49°	8.6	回転糸切り 焼成良好、ひずみ
溝1-27、 33	8図8	溝1	土師器 坏	ほぼ 完形	白系1	斜長石、角閃石 白色細粒、赤色粒	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	15.3	3.2	52°	9.7	右回転糸切り 焼成良好
溝1、 溝6-2	8図9	溝1、溝6	土師器 坏		白系1	斜長石 角閃石若干	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ		14.1	3.3	56°	9.8	右回転糸切り 焼成良好
溝1-	8図10	溝1	土師器 坏	1/2	白系1	斜長石粒 角閃石粒	浅黄橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	15.3	3.1	43°	9.6	右回転糸切り 焼成良好

第 2 表 土師質土器 - 小皿 - の属性観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土区 土構	器 種	残 存 率	色 調 系	胎 土	色 調	器 面 調 整		底 部 板 目 庄 痕	法 量 (cm)				備 考
								内 面	外 面		口 径	器 高	角 度	底 径	
溝6*1	9図1	溝6	土師器 小皿	4/5	白系1	斜長石粒、赤色粒 角閃石、金雲母	淡黄色	回転ナデ 見込・一定 方向ナデ	ヨコナデ	○	8.4	1.1	59°	7.0	右回転糸切り 焼成良好、スス付着
溝6-5	9図2	溝6	土師器 小皿	完形	赤系4	白色粒、角閃石 赤色粒、金雲母	橙色	回転ナデ	ヨコナデ	○	8.4	1.0	59.5°	7.1	右回転糸切り 焼成良好
溝1*1	9図2	溝1	土師器 小皿	ほぼ 完形	白系1	角閃石、赤色粒 金雲母	浅黄橙色が基調	回転ナデ	ヨコナデ	○	8.4	1.0	4.90°	6.8	右回転糸切り 焼成良好
溝1-4	9図4	溝1	土師器 小皿	1/2	白系1	角閃石、赤色粒 金雲母	浅黄橙色が基調	回転ナデ	ヨコナデ		8.35	1.5	64°	6.5	右回転糸切り 焼成良好
溝1-10	9図5	溝1	土師器 小皿	ほぼ 完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、金雲母	淡黄色	回転ナデ	ヨコナデ	?	8.3	1.2	56°	6.35	右回転糸切り 焼成良好、ひずみ大
溝1-19	9図6	溝1	土師器 小皿	1/2	白系2	斜長石、角閃石 赤色粒	浅黄色が基調 灰色に近い	回転ナデ 見込・一方 方向ナデ	ヨコナデ	○	8.3	1.2	55°	6.9	右回転糸切り 焼成良好、細が素地
溝1-44	9図7	溝1	土師器 小皿	1/2	赤系3	角閃石、白色粒 赤色粒	明赤褐色が基調	回転ナデ	ヨコナデ	○	8.51	0.9	67°	7.3	右回転糸切り 焼成良好
溝1-42	9図8	溝1	土師器 小皿	ほぼ 完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒	淡黄色が基調	回転ナデ	ヨコナデ	?	8.1	1.0	55.5°	6.5	右回転糸切り 焼成良好
溝1-32	9図9	溝6	土師器 小皿	ほぼ 完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒	淡黄色が基調	回転ナデ	ヨコナデ	○	8.0	1.3	59°	6.2	右回転糸切り 焼成良好
溝6-7	9図10	溝1	土師器 小皿	ほぼ 完形	白系1	斜長石、金雲母 赤色粒	淡黄色が基調	回転ナデ	ヨコナデ		8.4	1.3	55°	6.55	右回転糸切り、0.22mmの糸痕跡 焼成良好
溝1-22	9図11	溝1	土師器 小皿	完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒、金雲母	浅黄橙色が基調	回転ナデ 見込・多方 方向ナデ	ヨコナデ	○	8.5	1.3	60°	7.0	右回転糸切り 焼成良好
溝1-39	9図12	溝1	土師器 小皿	ほぼ 完形	赤系1	白色粒、角閃石 赤色粒	にぶい橙色	回転ナデ	ヨコナデ		8.4	1.3	56.5°	6.75	右回転糸切り 焼成良好
溝1-37	9図13	溝1	土師器 小皿	ほぼ 完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒	淡黄色が基調	回転ナデ	ヨコナデ	○	8.3	1.0	47.5°	6.3	右回転糸切り 焼成良好
溝1-21	9図14	溝1	土師器 小皿	ほぼ 完形	白系1	斜長石、角閃石 赤色粒	淡黄色が基調	回転ナデ 見込・一方 方向ナデ	ヨコナデ	?	8.3	1.4	47.5°	5.9	右回転糸切り 焼成良好

標本数36例中、胎土中に金雲母・赤色粒の全部または一つ含む量は86%に達する。全部含む場合も50%の高い率を示している。またどちらか一つの場合が赤色粒である出現率は（一つ含んだ13例中の割合）、85%に達している。このことは土師質土器の中に含まれた赤色粒の量が多いことと相関関係にあると考えられる。実際、肉眼観察において赤色粒は比較的目立つが、金雲母は目立たない。したがって胎土中における細砂粒の量に由来する器面上の質感が一致する状況や後述する色調が類似する状況などからみて、大多数は同質性の強い素地であることが予想される。

このほか非常に細かい粒子からなる素地を用いた坏と小皿がある。これらは図示していない坏と、図示している小皿（第9図6）の二つからなる。小皿の観察表に赤色粒の存在を記しているが、ほかの個体に見られる赤色粒と比較してやや異質な感じがする。いずれにしてもこの二例はほかの土師質土器とはたやすく区別できる。

色調 この点も表に示しているとおりであるが、胎土と同様に見つかった土師質土器群分別（生産地を念頭においた区分）の際の重要な視点であろう。本遺跡の土師質土器の色調は、朱色に近い一群の「赤系」と白色～灰色に近い「白系」に区分できる。更にこの赤系と白系は以下に示すように区分できる。

・赤系1 色調を明赤褐色としている例で、1点だけからなる（第8図6）。色自体は人によっては茶褐色とも記述され、土師質土器に多く見られてきた色である。この例が本遺跡において独特であるのは、部分的でなく全体がまんべんなく明赤褐色であることにある。色調から見ると、焼きむらは全くないので同程度の火力が平均的に影響したことがうかがえる。

・赤系2 色調をにぶい橙色としている例で、1点だけからなる(第9図12)。約 $\frac{2}{3}$ がにぶい橙色部分で、残りが白色～灰色系統の色である。これは焼むらと考えられる。

・赤系3 色調を明赤褐色としている例で、1点だけからなる(第9図7)。全体が赤黒いという表現が適当な色である。焼むらはないが、不自然なくらいなほど赤黒さが目立つところが異様である。この赤系3と同様な赤黒い色の土師質土器は近隣の遺跡で見つかった標本の中に見ることができない。おそらく二次的な加熱等、通常の条件下と異なった焼成の由来を有することが推測される。

・赤系4 色調が橙色の例で1個体からなる(第9図2)。赤系として色がうすい部類。焼むらであろう。

・白系1 色調を浅黄橙色・淡黄色・にぶい褐色としている例で、この遺跡で見つかった土師質土器の大半がこれにあたる。

・白系2 色調が淡黄色を基調とし、灰色に近いとした例で、図示していない例を含め2個体からなる(第9図6)。

色調系と胎土・器形 土師質土器群がその属性ごとに区分され、それぞれの群ごとに生産地～生産集団に区分される可能性があるのかないのかを視野に入れたうえで色調系・胎土・器形について整理したい。

赤系1は1個体のみであるが、その質感は後述する白系1に類似して若干のザラつきが感じられる。これは胎土中の粒子がほぼ同程度に混在していることと関係あるだろう。しかし大豆大の赤色粒が一個観察されるだけで、細かな赤色粒と金雲母は認められなかった。この赤系1に属する唯一の個体である坏は、本遺跡で見つかった坏類の中では最も丁寧な作りである。ゆがみのない整形で、見込部も回転によるナデで均整のとれた凹凸である。赤系1の胎土自体は白系1に似る部分もあるが、製作職人が違うのは明らかである。

赤系2は1個体のみであるが、白系1に見られるのと同様な小さい赤色粒がある。金雲母は見られなかったが、元々微量であることから有無の帰結は判断できない。しかし赤系2の胎土を特色づけるのは、軽石の大粒を多量に含む点にある。特徴的に白色粒を含むことは唯一この1個体だけであり、しかも赤系の色調を焼むらと考えれば白系1のバリエーションの可能性も高い。

赤系3は前述したように全体が赤黒いという表現が適当な色調で、赤色粒を含んでいるようである。赤系3は本例だけであることと、2次焼成の可能性もあり、他の色調系に由来する可能性も高い。

赤系4は1個体だけであるが、薄い橙色系赤であることと、胎土に赤色粒と金雲母を含むことから白系1の焼むらに由来する例であろう。

白系1は前述した胎土の項目で金雲母と赤色粒を特徴的に含有するとして一群のすべてがこれに入る。白系の軟質な器面であるうえに、調整や整形が雑な点に共通性がある。

白系2は前述した色調の項目で2個体だけであることを指摘したが、灰色に近い軟質な焼成で細かい粒子のみからなる。

以上、色調系ごとにまとめて見た。その結果、本遺跡の土師質土器のほとんどは白系1を中心とし、これに確実なところで製作集団の違う白系2が加わっていることになる。この他、赤系1が生産者(地)の由来を異にする可能性があるものの、赤系2・赤系3は白系1の範中での理解が可能な部分もある。これまで二カ所の生産地からの供給を示すものとして白系1と白系2を抽出したが、これは胎土・焼成・色調の類似を根拠にしている。

ところで太田村森の木遺跡や三光村深水邸遺跡等の土器群など非日常(祭祀・宴)場で使用されるものは、同一産地のものが一括購入され、使用されたのち一括廃棄されている。賀来・城遺跡の土師質土器白系1もそうした観点で理解できる。

V ま と め

最も良好な遺物が得られた中世の遺構と遺物について簡単にまとめてみたい。

磁器は本文に示すとおり森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類（定・邢窯系）、白磁碗Ⅴ類-1?、青磁皿Ⅰ類1 a、青磁碗Ⅰ類1 bがSD1・SD6から見つかっている。周辺の包含層中からは龍泉窯系青磁碗Ⅳが見つかっているが、SD1・SD6では見つかっていない。SD1とSD6の磁器類は、山本信夫氏の区分に当てはめるとC群・D群に相当する。そこで龍泉青磁Ⅳ類がないことから12世紀中頃から終末までに位置することになる。

これまで、輸入磁器の組成から12世紀中頃～後半に位置づけるのが妥当であると考えた。更にまた宇佐市神田遺跡SD1・SK10・SK6から15cm前後の口径をもつ坏が出ており、賀来・城遺跡に坏によく似た一群である。しかも神田においては山本信夫氏の分類にある白磁碗Ⅴ4 b類・Ⅴ4 c類等D期に相当する磁器が出ていることと龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5 aが出ていないことから12世紀後半に位置する一括資料であろう。

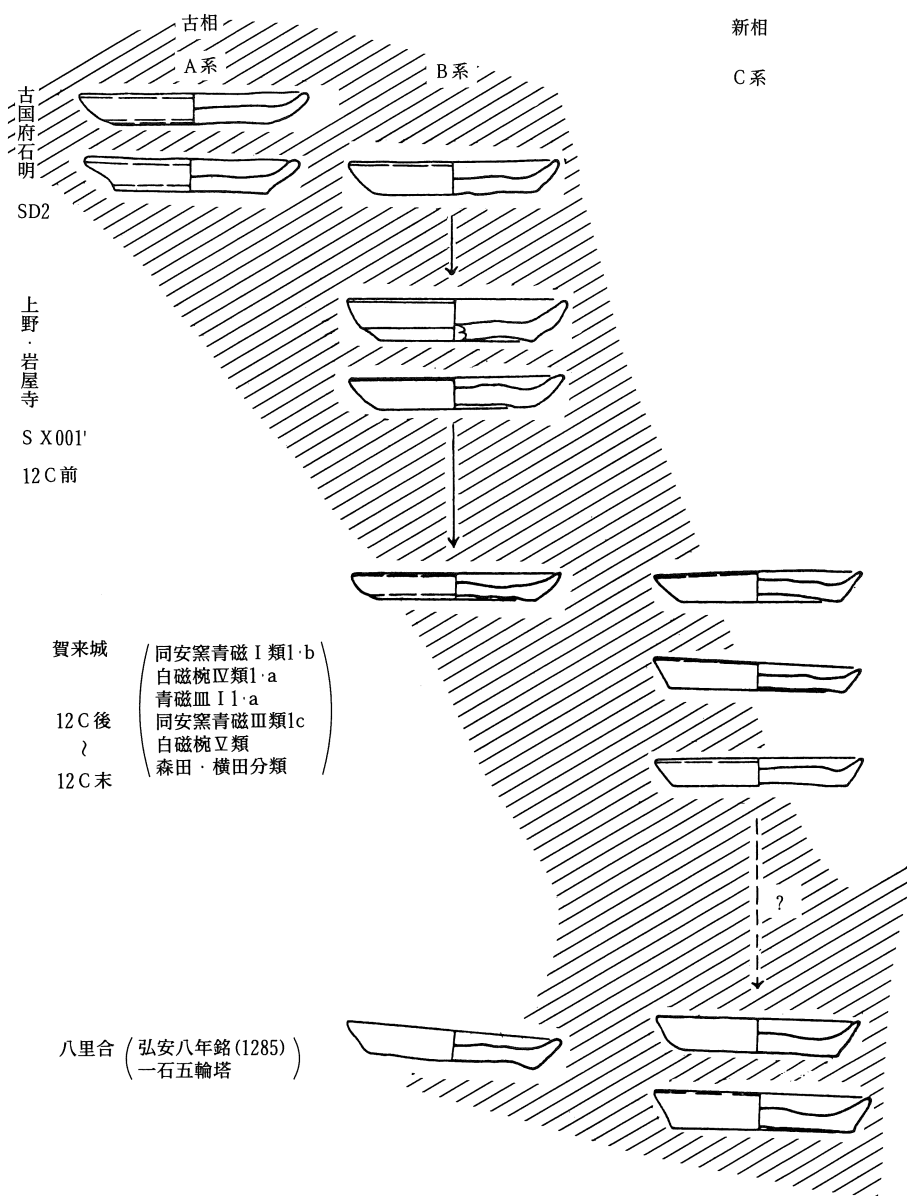
本遺跡の小皿は法量の点で非常に規格性が高いということと、器形の点でも非常に類似性が高い第1類が主体を成すことに特色がある。

この点で、大分平野中枢部における規準資料になるであろう。このような意味で平野部の遺跡と近隣地域の小皿を整理してみることにする。

まず大分平野や大野郡地域においては、13世紀後半に位置づけられる野津町八里合例や14世紀中頃に位置づけられる利光久保例などの小皿の口縁端部を尖り出す例が目立っている。これは新しくなると口縁端部を尖らせる小皿が増加していく変化の方向性を示していると理解することができる。

以上のような観点で、4ヶ所のいいから見つけた小皿をA系・B系・C系の三つに区分し並べてみた(第14図)。

古国府石明においてはA系とB系がある。A系の小皿は体部の開きがゆるやかで、見込みとの境界がはっきりしない。更に口縁端部を丸く収めることで図示した二例は共通するが、底部から体部外面への変化が漸



第14図 12世紀における大分平野の小皿 変化の方向性

多的なものとはっきりするものがある。B系の小皿も体部の開きがゆるやかで見込みとの境界がはっきりしないが、口縁端部がやや尖り気味になる。B系における底部から体部外面の変化は、A系における底部→体部変化のうち「境界のはっきりした」ものに相当する。

上野・岩屋寺S X001黒色土ではB系だけがある。その特徴は古国府石明SD2の例とはほとんど変わらない。

賀来・城遺跡においてはB系とC系があり、後者が90%以上を占める。B系は本書の本文中で区分した第2類に当る。見込みと体部がはっきりしないことは前段階と変わらないが、口縁端部を鋭く尖らせるところに特徴がある。C系は見込みと体部の境界がはっきりし、口縁端部を鋭く尖らせている。なおC系は本書の本文中で区分した第1類に相当する。B系もC系どちらも口径が8.3cm～8.5cm間に収まるという高い規格性をもっている。

13世紀前半～13世紀中頃にかけての資料がはっきりしないが、型式方向性は野津町八里合の例で推し計れよう。八里合では弘安八年銘(1285)をもつ一石五輪塔の至近から一括して土師質土器が見つかっている。ここではB系とC系がある。B系は一例だけで、C系がヴェリエーションの可能性もある。C系が最もこの段階の特徴を示している。八里合のC系(小皿)自体は賀来・城のC系(小皿)とほとんど変わらないが、器高が高くなることよって見込みから口縁端部の高さの容積高も大きくなることに特徴がある。

A系・B系・C系という区分は、単に坏A・坏B…といった区分ではなく、型式上の古い属性が新しい属性と共存しながらも新しい属性に変わっていく推移であると考えられよう。

ところで大分市上野・岩屋寺S X001黒色土出土の土師質土器には底部糸切りのものと、ヘラ切りのがあり、底部糸切りのものに充填高台の椀がある。この椀について塩地潤一氏は共伴する瓦・中国陶器や瓦器椀から12世紀前半に位置づけている(塩地1995)。同じく見つかった小皿についても同様な年代と考えた。

これまで筆者は賀来・城の土師質土器の年代を山本信夫氏の陶磁区分のD期で土器区分のXV期にあたることと磁器組成及び坏の口径と糸切り離しであることから12世紀後半と考えた。太宰府においてはXV期(12世紀後半)に坏の口径が15.6cm近くに達する(山本1990)。賀来・城の坏も太宰府で最大に達した口径に対応するものだろう。ところが小皿は太宰府では口径が9.2cm前後であるが、賀来・城では8.3～8.5cmに大半が集中する傾向がある。加えて器形も異なる状況がある。小皿における口径が太宰府の小皿の口径と違うという点については村上久和氏が大分県三光村深水邸埋納遺跡の例をあげている。その背景として「デポ」という発見状況から祭祀に関わることが考えられるので特注品であるとする(村上1995)。

深水邸遺跡のような完形品ばかりの小皿ではないが、賀来・城や豊後国分寺の溝や土坑出土の土器も祭祀に関わるものである。また胎土の面からみると、国東半島の武蔵町周辺では土師器の供給がかなりせまい範囲であることが知られている(小柳1994)。さらにまた太宰府周辺でも祭祀が行われたと考えるのが自然な状況なので、深水邸からの資料に対しての特注品よりも郡単位～郷単位の変異があったと理解するほうが判りやすい。太宰府とその他地域の土師質土器に違いがあるのはすでに山本信夫氏が「九州上代文化論集」掲載論文で記述しているところである。要するに輸入陶磁の共伴を参考として、各平野・郡・郷単位での編年をするなかで「特注品」説も検証していく必要が出てきたということになるろう。

参考文献

- 小柳 和宏 1994 「豊後国田原別符の調査」I『大田村文化財調査報告書』第1集、大田村教育委員会
 佐藤良二郎 1996 「宇佐市神田遺跡出土の黒色土器について」『第6回九州土器研究会－豊後の土器相について考える－発表要旨資料』大分・大友土器研究会
 塩地 潤一 1995 「大分市上野・岩屋寺遺跡S X001出土土器の検討」『大分・大友土器研究』第7号
 坪根 伸也 1992 「賀来中学校遺跡－大分市賀来中学校プール移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」大分市教育委員会
 二宮 好雄 1963 「賀来善神王宮」賀来神社

- 村上 久和 1995 「三光村深水邸埋納遺構出土遺物の検討」『大分・大友土器研究』第8号 大分大友土器研究会
- 山本 信夫 1990 「11、12世紀の貿易陶磁器—1980年代の編年研究を中心として」『貿易陶磁研究』No.10
PP11-34
- 山本 信夫 1990 「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『九州上代文化研究論集』乙益重
隆先生古稀記念論文集刊行会 PP49-386
- 山本 信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説・中世の土器・陶磁器』中世土器研究会論、真陽社
PP470-484
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4. 九州歴
史資料館

付 記 今回の小報の作成に際しては、筆者の他に阿部みゆき・今村信子（以上文化課）が遺物の実測・ト
レース・復元を行った。また、高橋 徹、村上久和・坪根伸也・塩地潤一の各氏から土器に関する御
教示をいただいたことが小報の作成に大きかった事を記してお礼の言葉に替えさせていただきたい。

付章 3. プラント・オパール分析による埋没水田の可能性の検討

大分短期大学助教授 佐々木 章

土壤中に残ったプラント・オパールを顕微鏡下で検出することで、過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定する方法をプラント・オパール分析法と呼ぶ。埋没水田土層にはイネ機動細胞プラント・オパールが多量に含まれるので、プラント・オパール分析を実施することで水田土層であるかどうかを検証する手掛かりを得ることができる。

今回、賀来・城遺跡では、現在の水田の下部に古墳時代と弥生後期の遺構が検出された。さらに下部には暗褐色の粘土層が認められ、その色調から埋没水田の可能性が指摘された。そこで、プラント・オパール分析によって、その可能性を検討した。

調査分析方法

賀来・城遺跡の断面を観察して、分析用の土壌を採取した。現在の水田作土層の下は⑤層まで褐色が強いシルトないし粘質シルト、⑥⑦層は暗褐色の粘土層、⑧層は褐灰色粘土であった。④では古墳期に比定される遺物を伴う遺構が検出された。⑥層は⑦層よりも更に暗色を示すことから水田作土層の可能性が指摘された。この層は、遺物は検出されていないが、弥生時代後期末の遺構が検出された土層の直下にあたる。土壌試料は各層ごとに中央部から採取した。

プラント・オパールの大きさは50 μ mと微小なので、土壌試料採取にあたっては、亀裂の発生していない箇所を選ぶなど、試料が汚染されないように細心の注意が必要である。試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り通常の定量分析を行った(図1)。

結果および考察

プラント・オパール分析結果を植物中の珪化機動細胞密度(表1)によって植物体重に換算して、図2に示す。単位は、広さ10a(1,000 m^2)深1cmの土壤中に埋没した植物の地上部乾物重(t)で示した。イネについては、地上部乾物重のうちモミ量を推定して合わせ示した。

分析結果を見ると、全体的にプラント・オパールが少ない。イネに注目すると、現在の作土層にあたる①層でも1.5(t/10a/cm)と比較的に少ない。さらに下層ほど減少するが⑤層までは検出される。問題になっている⑥層からは検出されなかったが、さらに下層の⑦層からも極少量ではあるが検出された。

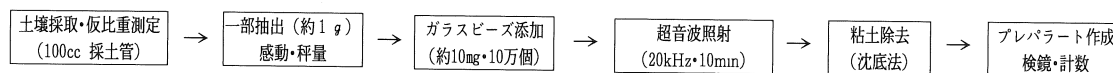


図1 プラント・オパール定量分析手順

表1 植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール 分析分類名	代表植物	植物体中密度 (10 ⁴ 個/g)
イネ	イネ	<i>Oriza sativa</i> 3.40
ヨソ属	ヨシ	<i>Phragmites communis</i> 1.44
タケ亜科	ゴキダケ	<i>Pleioblastus Chino</i> 20.83
		<i>var. virides f. pumilis</i>
ウシクサ族	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i> 2.79

各地で検出された水田遺構土壌のプラント・オパール分析結果を総合すると、イネ初量に換算して、1 (t/10 a/cm) を越える場合は水田遺構の可能性が高いことが知られている。これに従うと、埋没水田が検出される可能性は低い。現在の作土層を含めて、長期にわたって水田化されていたのではなく、住居あるいは畑などとしてつかわれた期間もあったと考えられる。しかし、少量ではあっても⑦層からも検出されることから、付近にはイネが栽培されていたと考えられる。

イネ以外も少ないが、これら洪水層に始めから含まれていたものであろう。やや乾燥した場所に普通のウシクサ族やタケ亜科は上層にやや多く、水分を好むヨシは下層にやや多い傾向が認められる。このことは、遺跡周辺が乾燥化したことを物語っているのであろう。

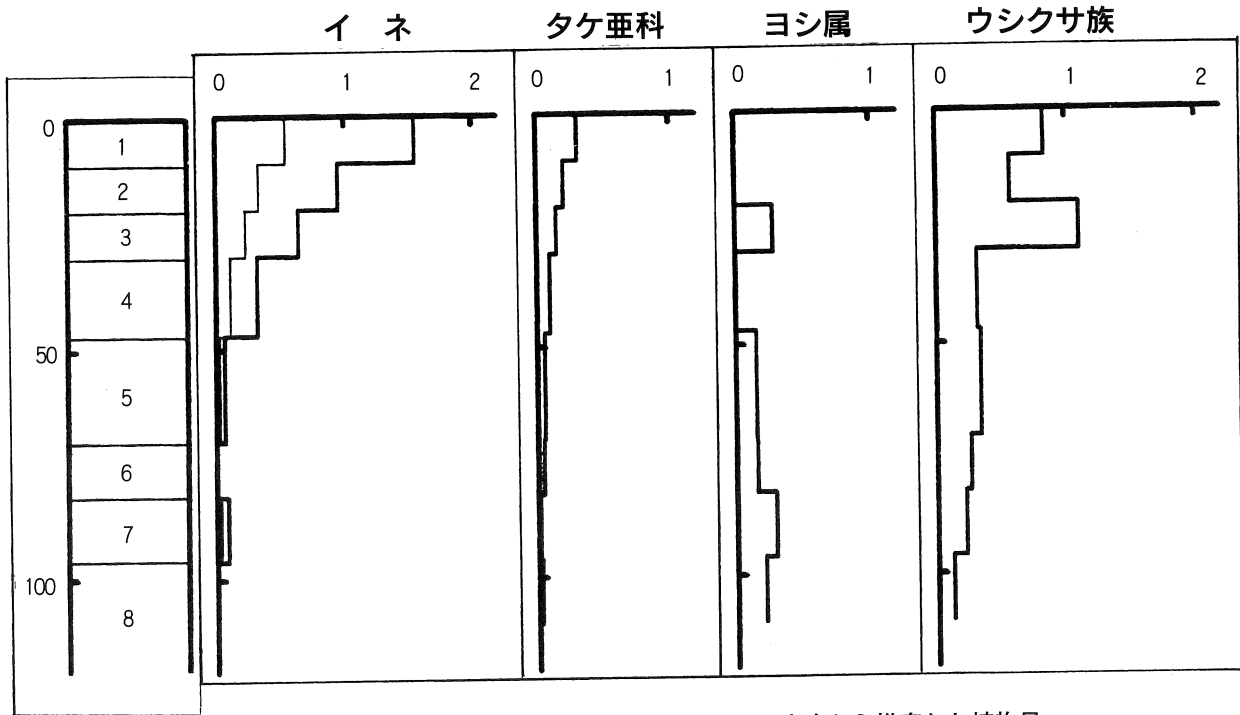
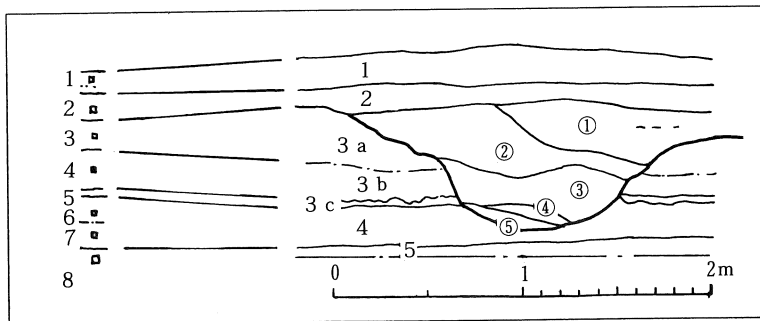


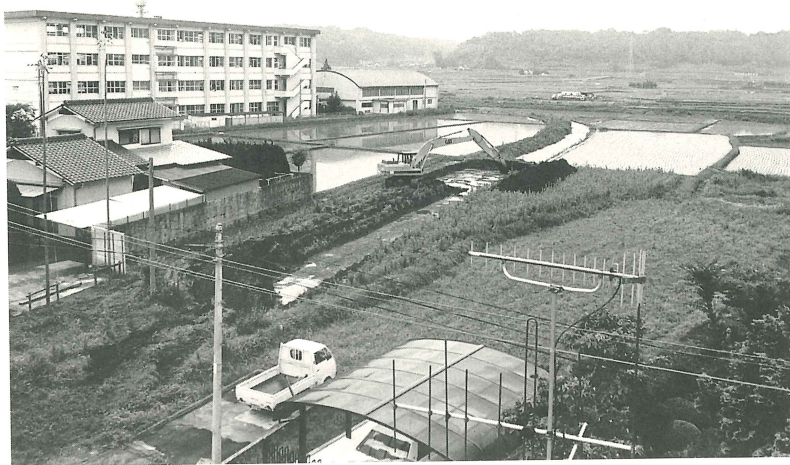
図2 賀来・城遺跡土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

※凡例 方形区画がサンプル採取部分



- 1 耕作土、暗褐色
- 2 床土
- 3 a 粘土赤褐色、配化している為か赤い、硬い
- 3 b 粘土、赤褐色
- 3 c 粘土、暗色粘土、洪水起源の粘土堆積
- 4 暗黒色、旧風化層、2枚に分けられる
- 5 暗灰色、赤色の配化粒がたてじま状

賀来・城遺跡近景
(東から西、右側遠方の
台地は国分団地)



賀来・城遺跡近景
(東から西)



主要発掘区
(西から東へ、右上方の
林は賀来神社)





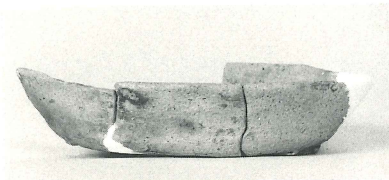
SD1の全景（東から西）



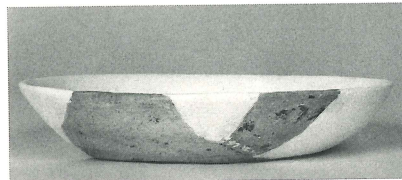
SD1の遺物
出土状態（南から北）



SD1の断面
（東から西へ）



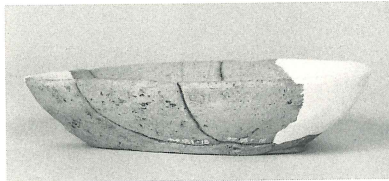
SD1-22 · 23 白系1 第7図1



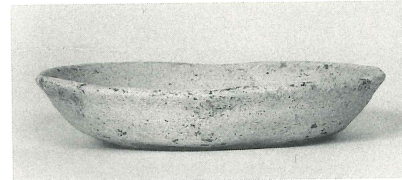
SD1-293 白系1 第7図3



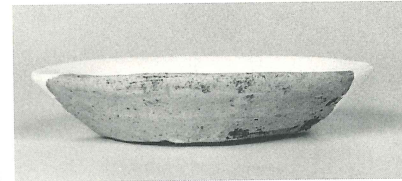
SD1-6 白系1 第7図4



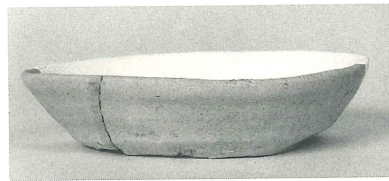
SD1-18 白系1 第7図6



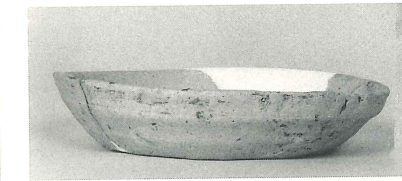
SD1-20 白系1 第7図7



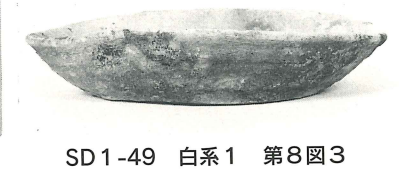
SD6 白系1 第7図10



SD1-36 白系1 第8図1



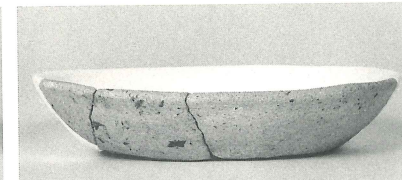
SD1-7 白系1 第8図2



SD1-49 白系1 第8図3



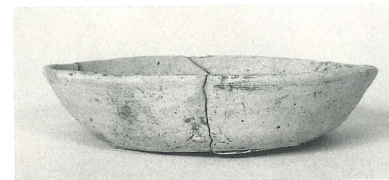
SD1-41 赤系1 第8図4



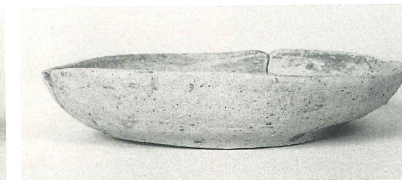
SD1-1 白系1 第8図5



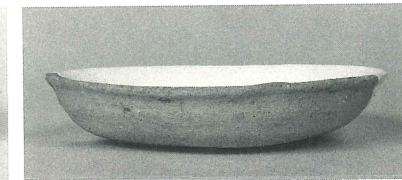
SD1 赤系1 第8図6



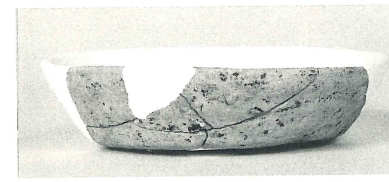
SD1-5 白系1 第8図7



SD1-27 · 33 白系1 第8図8



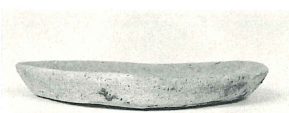
SD1 白系1 第8図10



SDI# 白系2 図なし



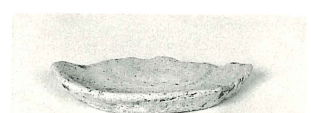
SD6 # 白系1 第9图1



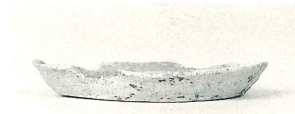
SD6-5 赤系1 第9图2



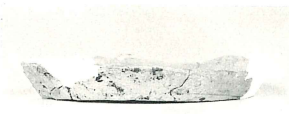
SD1 # 白系 第9图3



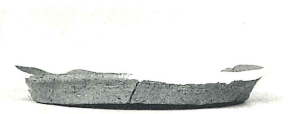
SD1-4 白系1 第9图4



SD1 白系1 第9图5



SD1-19 白系2 第9图6



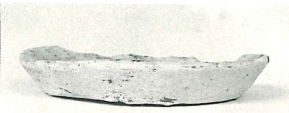
SD1-44 赤系 第9图7



SD1-42 白系1 第9图8



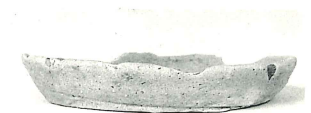
SD1-32 白系1 第9图9



SD6-7 白系1 第9图10



SD1-#2 白系1 第9图11



SD1-39 赤系2 第9图12



SD1 白系1 第9图13



SD1-21 白系1 第9图14



SD1-22·23 白系1 第7图1



SD1-29 白系1 第7图3



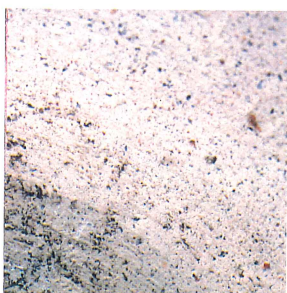
SD1-6 白系1 第7图4



SD1-18 白系1 第7图6



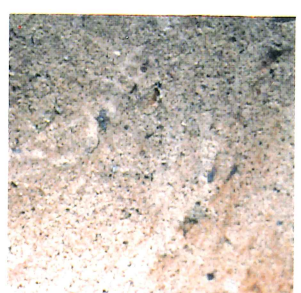
SD1-20 白系1 第7图7



SD6 白系1 第7图10



SD1-7 白系1 第8图2



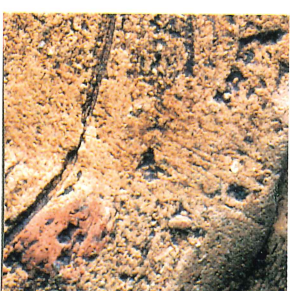
SD1-49 白系1 第8图3



SD1-41 白系1 第8图4



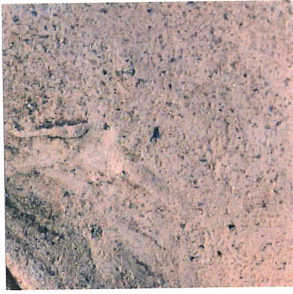
SD1-1 白系1 第8图5



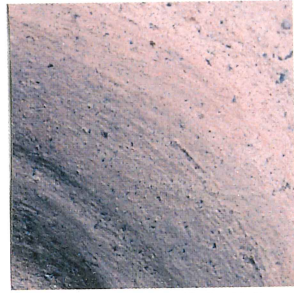
SD1-8 赤系1 第8图6



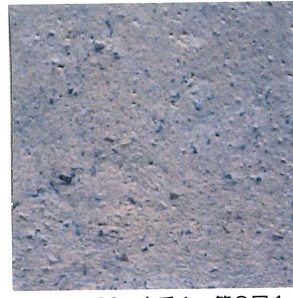
SD1-5 白系1 第8图7



SD1-33·27·24 白系1 第8図8



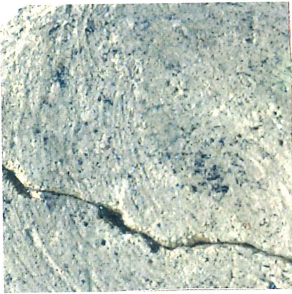
SD1 白系1 第8図10



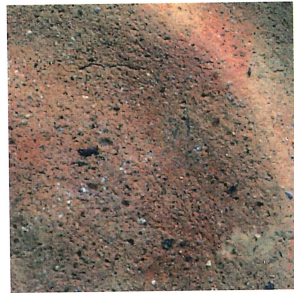
SD1-36 白系1 第8図1



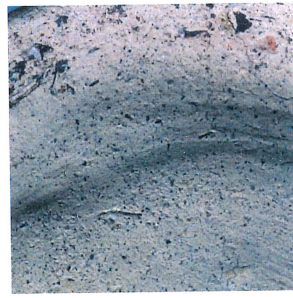
SD1 白系2 図なし



SD6-# 白系1 第9図1



SD6-5 赤系4 第9図2



SD1-# 1 白系1 第9図3



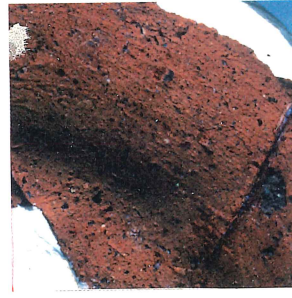
SD1-14 白系1 第9図4



SD1-10 白系1 第9図5



SD1-19 白系2 第9図6



SD1-44 赤系3 第9図7



SD1-42 白系1 第9図8



SD1-32 白系1 第9図9



SD6-7 白系1 第9図10



SD1-# 2 白系1 第9図11



SD1-39 赤系2 第9図12



SD1-37 白系1 第9図13



SD1-21 白系1 第9図14

報 告 書 抄 録

フリガナ	ガランジイセキ・ワサダイチイセキ・ワサダジョウリイセキ							
書名	ガランジ遺跡・植田市遺跡・植田条里遺跡							
副書名	国道210号バイパス（木の上工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	小柳和宏、綿貫俊一、吉田 寛							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	〒870 大分市府内町3丁目10-1 0975-36-1111（内 5496）							
発行年月日	1997年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ガランジ遺跡	大分市大字口戸字ガ ランジ	442011	——	33°11'00"	131°34'00"	1990.10 } 1990.11	2,000㎡	道路建設
植田市遺跡	大分市大字市字垣内 ほか		322112	33°11'00"	131°34'30"	1990.12 } 1993.10	3,000㎡	
植田条里遺跡	大分市大字玉沢字小 野田、西反田、小柳		322111	33°11'30"	131°35'30"	1993. 4 } 1993.12	4,000㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ガランジ遺跡	集落 水路	弥生後期 中世	住居跡 溝跡	土器 磁器				
植田市遺跡	集落	古墳中期 中世 近世	住居跡 溝跡 掘立柱建物跡	土器 陶磁器 陶磁器				
植田条里遺跡	集落 水田	弥生後期 古墳前期 古墳後期 近世	溝跡 溝跡区住居跡 水田跡 水路跡	土器 土器、仿製鏡 須恵器 陶磁器				

国道210号バイパス（木ノ上工区）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

ガランジ遺跡・植田市遺跡・植田条里遺跡

発行年月日 1997年3月31日

編集・発行 大分県教育委員会（大分市府内町3-10-1）

印刷 ㈱明文堂印刷



木の上

市

玉沢

上原

下原

丸山

新原

赤坂

大井町

高米

池田

大坪

石橋

赤坂

野崎

玉沢

四月田

宮本

大谷

池田

大坪

石橋

赤坂

野崎

玉沢

四月田

宮本

塩田

大坪

石橋

赤坂

野崎

玉沢

四月田

宮本

下原

小野

大坪

石橋

赤坂

野崎

玉沢

四月田

宮本

下原

下小野

大坪

石橋

赤坂

野崎

玉沢

四月田

宮本

下原

丸山

大坪

石橋

赤坂

野崎

玉沢

四月田

宮本

下原

新原

大坪

石橋

赤坂

野崎

玉沢

四月田

宮本

下原

赤坂

野崎

玉沢

四月田

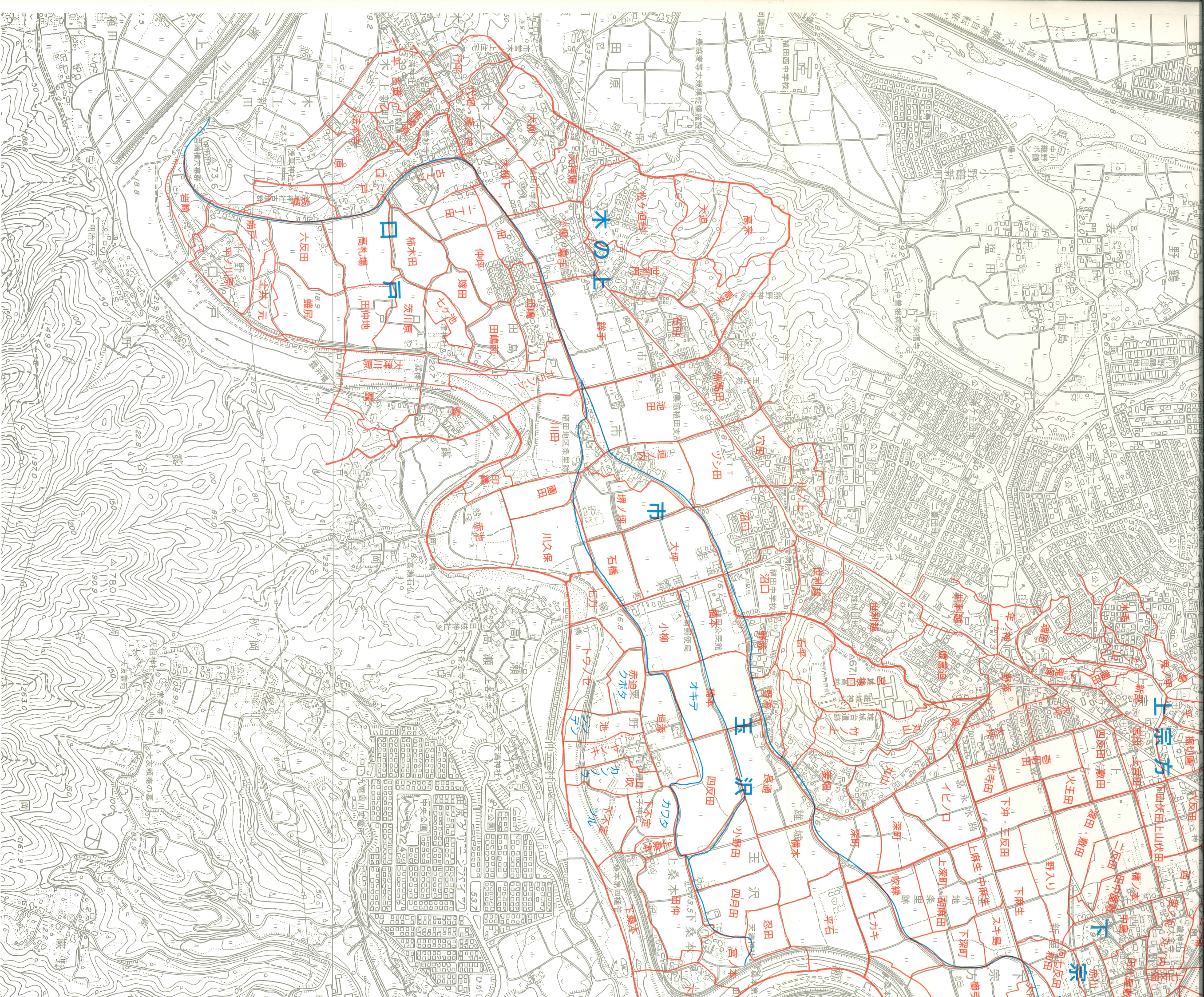
宮本

下原

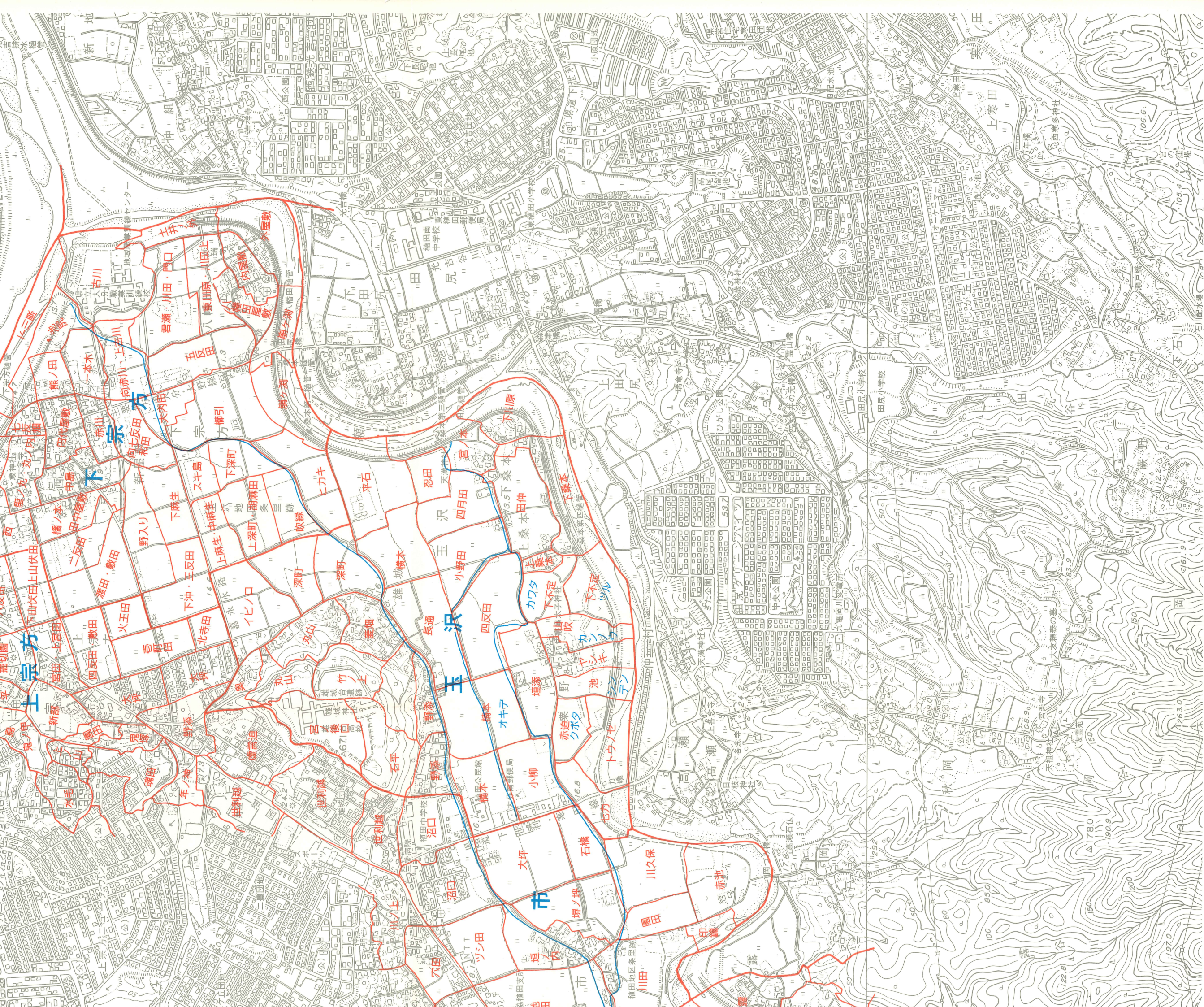
丸山

新原

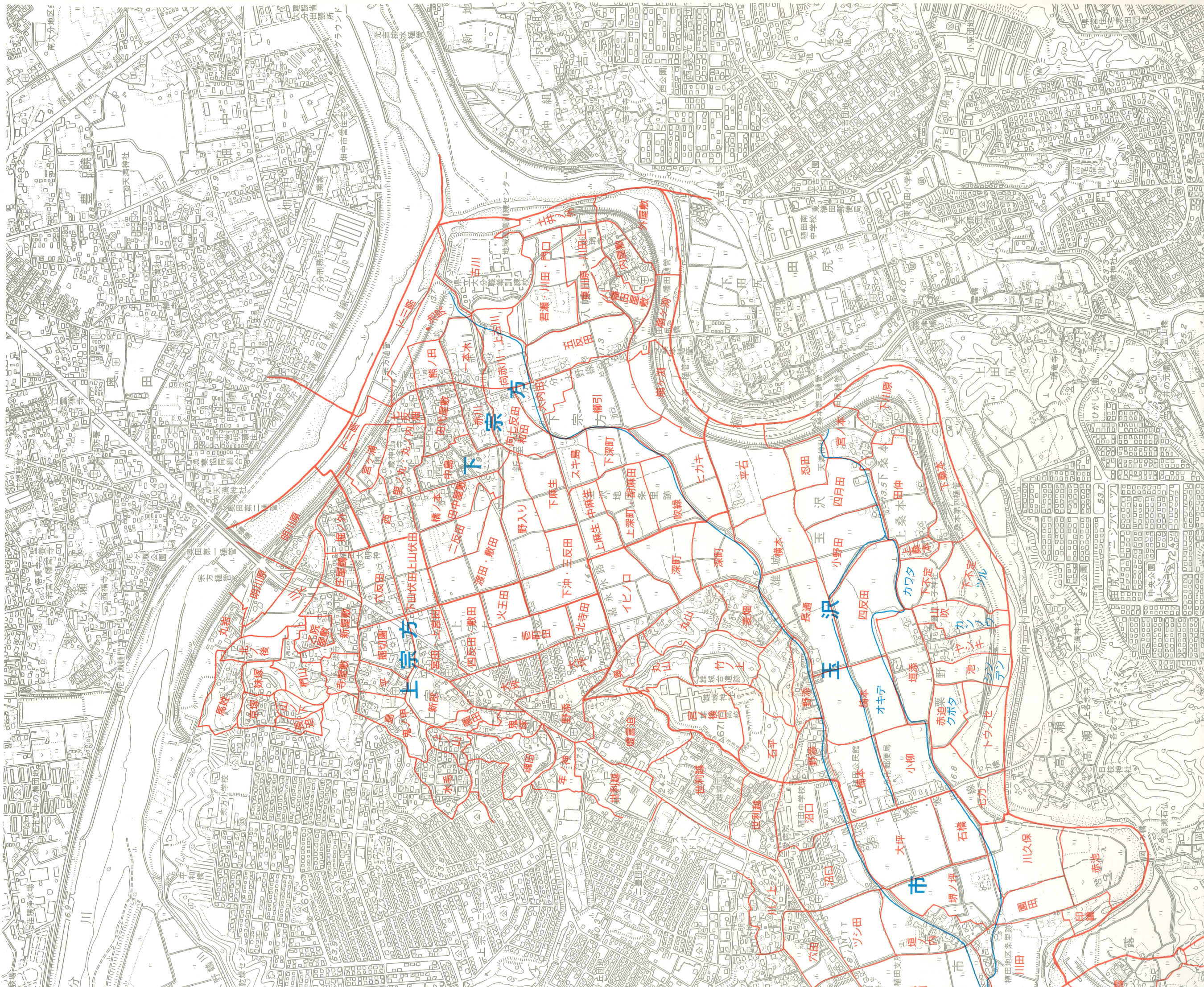
赤坂



付図 水路系統、小字切以図 (1:10,000)



付図 水路系統、小字切り図 (1 : 10,000)



上
下

玉
沢

市

川久保

赤池

印

田

川

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田